
ハンター初心者

楓 紅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハンター初心者

【Nコード】

N8156C

【作者名】

楓紅

【あらすじ】

ハンターになると夢見た弟から、姉はそれを了承しつつも、自分も弟離れをしようと秘かにハンター試験を受けに行く。そして、姉にはとても不思議な力を持っていた。それを気に入る人物が！女だとばれるな！姉！

姉との最後の別れ

「ゴン！本当にハンター試験、受けに行くの？」

ミケさんよりも誰よりも、この村で心配性だと知られている、自称、ゴンの姉、マロン。

ゴン「うん！だって、自分で決めた道だし！行きたいよ！マロン！」

ゴンは、マロンの事を本当の姉のように慕い、最後の別れを告げる。

「行っても良いけど、心配なのよ！怪我とか、変な男とか変な殺人鬼とか居そうで！」

・・・勘が昔から鋭いマロン。

当たってます；

ゴン「けど、行きたいんだ！」

こっとなった

ゴンは梃子でも動かない。

「・・・分かった！行っておいで！けど、バンクは連れて行きな！」

キツ

私は、なぜか、妖精みたいな幼獣みたいなモノを宿っていた。

ゴン「ええ？カーバンクルを？それなら、リバイアサンの方がいい！」

「贅沢言わないの！ゴンには操れないんだから！良い？バンク？ゴ

ンの事、宜しくね?」

バンク『はい!御主人しゃま!』

ちよっと、悪戯好きで子供っぽい所でゴンに似ているのでつけた;

(笑)

ゴン「それじゃー、時間だから、行くね!」

タツ!

「怪我して帰ったら、唯じゃおかないからね!」

ゴンは点となり、消えた。

ミト「……あんたの事だから、追いかけるんでしょ?」

チラツ

ミトはまだ、隣でゴンを心配そうに見ている人物に問う。

「良く分かってる!ミトさん!リバイアサンで飛んでいくから、船がなくなっても平気だし!」

ミト「……危険な旅なのよ?」

「ミトさん。そんなんで、私の意思が変わるとでも?」

ニヤッ

ミト「……分かったわ・行ってらっしゃい」

「……うん!今までありがとう!ミトさん!……」

「……」

村人「・・・二人とも居ないとは寂しいですね。」

ミト「本当です。」

(よし！一足先に、試験会場に着いた！)

スタッ

リバイア『・・・本当に、変装するのか？』

(うん！ユニコーンの人間バージョンに！・・・なんで？リバイアサンがよかった？)

リバイア『違う！だが、油断ならないぞ？』

(分かってる！それじゃ、行くから、黙ってて？ユニコーン？貴方の人間の姿を貸して？)

ユニコーン『はい。』

スウツ

マロンの姿はたちまち、金髪の青年になった。

マロン自身、ゴンとはまったく似ておらず、年も離れていた。

実年齢は20歳で、身長162cm。体重59kg(増えた;)。

髪の色は、銀髪に青を溶かした感じの、良い感じの女だった。

まあ、そんないい感じの女が一人で試験会場に入ったら、どんな目に会うかわからないし、ゴンには来るとは言っていないので、ばれるとヤバイ！

(フフツツVV ゴン！早くおいで！お姉ちゃんは先に入って待ってるよ？) スッ

そして、中に入った。

店主「いらっ

しえーい！御注文は？！」

「ステーキ定食。」

ピクッ

店主「焼き方は？」

「弱火でじっくり。」

店主

「はいよ！奥に通して！」

(やった！)

スッ

エレベーターに乗る。

そして、到着した(ステーキは平らげておいた)。

チンッ

(・・・ムサ・男ばかり。あ・自分も今、男だった・ゴンは・・・と、まだか！)

マーマン「番号札をどうぞ。」

番号札を受け取る。

(?番号札。302番って多いのかな?)

周りを確認してみるが、会場に狭しと人間が入っているの、多いのだと判断する。

(蒸し暑い。301番ってどんな人?)
ギタ「カタカタカタツ。」

(・・・気持ち悪い!アハハハ!何で、あんな格好してるんだらう?)

44番「・・・。」

ジーンツ

(・・・おおい?!44番にすっごく見られてる!)

トンパ「やあ!君、新人だね!」

「・・・。」

無視。

トンパ「・・・俺の

名前はトンパってんだ!」

「・・・。」 トンパ「・・・俺はこの試験で、

37回受験してるんだ!」

「・・・。」

トンパ「

お近づきの印にやるよ!」

「・・・。」

トンパ「

・・・何とか、いえよ!」

「・・・まず。」

トンパ「

?!な・・・なんだ?;」

「何で、俺がそれを貰い、飲まなければならぬ?二つ、お喋りは苦手でな。ウザイとしか思えない。三つ。これは、警告だ。今年は

新人潰しをしても意味をなさないと思うが？」

トンパ「?!」

「・・・ま

だ、何か用があるなら。」

スパンツ!

ドパツ!

トンパ「ひい?!」

「その、缶のように真っ二つにするが?」

キツ!

トンパ「くそ!?!」

タツ!

(・・・うざーい。)

ユニコ

ーン』口が悪いですよ?」

(・・・それじゃー、五月蠅い。)

ユニコー

ン』変わってない気が!」

(ユニコーン・良いじゃん・言葉遣いなんて!ゴンの前では直すし
!)

ユニコーン』もうそろそろ、ゴンさん離れをしたらどうですか?」

(・・・うん。)

ユニコーン』・・・

・随分、素直ですね!」

(私だって、20歳だしね。ゴンも子供じゃない。この試験は自分を試すために来てる。ゴンを守りたいからだけじゃない。)

ユニコーン』……半分以上はゴンさんを守りたいとお思いでしょ
うっ?」

(……そんな事ないさ!)

ユニコーン』・

……バレバレです……!」

(?どうしたの?ユニコーン?ほわああああ!)

44番「……。」

ジイ

ーッ

目の前で、ユニコーン(人間バージョン)の姿を見ているピエロが
居た。

(い……何時の間に……目……目を合わせては駄目だ!)

ユニコーン』無理です……もう、目を合わせちゃってます……」

(近い近い近い……!)

ユ

二』……俺も嫌です……」

ヒソカ「……実に美味しそうだVV」

「……ハア?!」

壁に瀨を預けているのにも関わらず、一生懸命、後ずさる。

ヒソカ「さっきのアレ。どうやったんだい?」

「さっきのっ?」

ヒソカ「アレ。」

ピッ

缶を指差す。

第一次試験開始!

「さあ?俺は知らないぜ?それより、少し、離れてもらえないか?」

ヒソカ「クツクツクVV 良いね。君。名前は?」

「・・・バロン」。

ヒソカ「“男爵”?」

「そう。忘れてくれ。」

ニッ

ヒソカ「嫌だVV」

「あ。そう。」

ヒュッ!

ヒソカ「!」

ザッ!

(男の時の名)バロンは

一瞬でヒソカから離れた。

「まあ、覚えてても良い事ないと思っけど?」

ニヤッ

ヒソカ「・・・本当に美味しそうだ」

(・・・怖かった!)

キルア「なあ?」

「わぎぢ?!!」

キルア(“わぎぢぢ”

?)(「あんた、凄いな。」

(・・・ゴンと同じ年位か?) 「何が?」

キルア「ヒソカとあんな風に喋るなんて。」

「あいつ、ヒソカって言うんだ? 君は?」

キルア「・・・キルア。」

「俺の名前はバロン。バロン=男爵って意味なんだ。」

キルア「!だから、ヒソカの奴、男爵って言ったのか?」

「そ。ね? キルア君って幾つ?」

キルア「・・・

喋るの嫌いなんじゃない?」

「?・・・ああ。それも聞いてたんだ? 嫌いだよ? 新人潰しとかズルする奴。けど、キルア君ってズルはしなさそうじゃん?」

キルア「そうとは限らないぜ?」

「

俺、弟が居るんだけど。」

キルア「?」

「すっごく

素直で直球馬鹿なんだ。」

キルア「ハア? : ;」

「・・・キ

ルア君もそうなんじゃ?」

キルアの顔をじっと見つめる。

キ

ルア「・・・どうかな?」

「12、3歳ぐらいの男の子は素直でなきゃ。」

ニッ

キルア「ドキッ！って！相手は男だぞ？！」
「どうして、そう思うんだ？」

「・・・勘かな？それに、姉弟を持つ心境としてはな。」

ニコッ！

キルア「・・・バロンって変な奴。」

「年上は敬えよー。」

キルア「その弟もこの試験に？」

「ううん。」

俺、ブラコンですから。」

キルア「怪我でもされたら、相手を殺すとか？」

「いや。俺が死んじゃう！」

キル

ア「?!アハハハハハ！」

「ええ?!大笑い?!酷くない?!」

キルア「あんた、面白。」

「・・・良かった。」

キルア「えっ？」

ポフッ

「何で、悩んでるかは知らないけど、俺でよかったらいつでも相談に乗るぜ?」

キルア「?!・・・気付いてたのか?」

「うん。キルアの目が殺しをして居る奴らの目だった。けれど、それを受け入れたくないような顔もしていた。荷が重いなら捨てちまえ。」

キルア「……無理だ……」
「つかったら言ってくれ。」

「そう。けど、き

キルア「……了解。」

チンッ

その時、エレベーターからゴンたちが降りてきた。

(ああ！ゴン！隣の子達は一体、誰だい?!)

姉心でゴンを心配する……が。

(駄目駄

目・少し距離を置こう！)

キルア「？バロン？」

「向こうに行

く。始まるみたいだし。」

キルア「えっ？……一緒に行けないの？」

「んん？俺の弟も12歳でね？皆の側に居ると、心配ばかりしてしまっ。離れて見守るよ。」

キルア「……バロン！」

「？」

チラッ

キルア「……またな！」

「……ああ。」

「ニッ

そして、一足先にバロンは走った（サトツはもう走り始めていた）。

（足軽い。流石は、ユニコーン。人間姿でも良い感じ。）

そう思いながら、サトツの隣へと付く。

サトツ「……。」

「あの？良いですか？」

ジッ

サトツ「はい？なんですか？」

「これは、持久力

テストではないですね？」

サトツ「……何故、そう思われるのですか？」

「……持久力テストだけじゃ、今回の受験生達は持久力テストだけで減るような奴らじゃない。」

サトツ「……。」

「多分、この試験で基礎

体力を見ているのでは？」

サトツ「……さあ？どうでしょう？」

タタタタタッ

（おう？！スピードが速くなった・まあ、付いて行けますけど；）

ユニ『……大丈夫ですか？』

（うん！

この姿が鬱陶しいけど；）

ユニ『ひどくないですか？主？』

バ

ンク『御主人しゃまー！』

(カーバンクル!)
です!先に行くなんて!」

バンク『酷い

(ごめん・今、ゴンに近づけないから・バンクの事は覚えてたよ? ;)

バンク『本当でしゅか?..』

(本当本当。あ。外だ。)

サトツ「ここは“ヌメーレ湿原”。騙しの森といわれております。騙されないようにしっかりと付いてきて下さい。」

キルア「バロン!」

タツ!

「キルア。」(後ろに居るわ、ゴンではないか!)

テンション上がる。

キルア「なんか、変な試験だな。あ。こいつはゴン!俺の友達!」

ゴン「始めまして!バロンさん!」

「うん。始めまして。」

ゴン「...バロンさんって俺とどっかで会った事ないですか?」

「ないよ?何故?」(ここういふ勘だけは鋭いからなあ。ゴンは...)

ゴン「...失礼ですが、御いくつですか?」

「秘密。」

キルア「?どうした?ゴン?」

ゴン「俺、血の繋がってない姉さんが居るんだけど。」

キルア「で?」

ゴン「・・・マロン”って言って、20歳で、ちょっと不思議な力を持つてるんだけど。」

キルア「?」

ジッ

ゴン「雰囲気似てるんだ。」

「気のせいだよ。俺は“マロン”なんて女知らないし、ゴン君とも始めて会ったんだ。」

ゴン「ええ?そうかな?」

キルア

「そんなに似てるのか?」

ゴン「うん!何がつて訳じゃないけど、不思議な感じが。」

キルア「どんなんだよ;」

その間、

一騒動が起こっていたが。

サトツ「では、行きましょう。」

問題なく進

んだ; (人死んだよ?!)

ヒソカと密会

あれから、又メーレ湿原を問題なく走っていたが……。

(……血の匂いが濃くなってきている。嫌だ……)

サスツ

マロンは自分の体を擦る。

キル

ア「大丈夫か？バロン？」

「……ヒソカが後ろへと後退した……人を殺す気だ……」

ジツ

後ろを見据えながら言う。

キルア「……バロン？」

「……俺、ヒソカを止めに行つて来る。」

ヒュツ！

キルア「?!バロン?!」

ゴン「……

・やっぱり、似てる。」

キルア「え？」

ゴン「……マロンも、人

が死ぬのが嫌いなんだ……」

キルア「……。」(ゴン?)

レオリオ「うわあああ!」

ゴン「?!レオリオの声だ!俺も行く!」

ダッ!

キルア「?!ゴン!行くな!・・・クソ!;」

ヒソカ「クツクツク。どうしたんだい?まだ、全然、本気を出していないよ?」

「止める。ヒソカ。」

ズザッ!

クラピカ「?!・・・誰だ?」

ヒソカ「バロ

ン。来てくれたのかい?」

(もう既に何人が殺されている・直せる?ユニコーン?)

ユニコーン『お姿が・ばれますよ・』

「君達は下がって。」

「怪我をさ

レオリオ「俺達も戦う!」
せたくないんだ!行け!」

クラピカ「;すまない!行くぞ!レオリオ!」

(話し分かる子だ。)

レオリオ「・・・;怪我をするなよ!」

ダッ!

「・・・ユニコーン!」

ユニコーン『直ぐに。』

ヒソカ「?!・・・君は誰だい?“バロン”は?」

ジッ

「私はマロン。残念ながら、バロンは相手できない。でも、私が戦う。」

キッ

ヒソカ「……“念”かい？」

「?何の事？」

ヒソカ（気付いていない。「……行くよ?」

ヒュッ!

(シヴァア!)

シヴァア『はい!』

スッ

サラッ!

マロンの姿は水色の服で、

水色の髪の水色になった。

ヒソカ「へえ?面白い念だ。」

「?何を言ってる?」

ヒュッ!

ヒソカが掛かってきた。

ユニコーン『主!ユニコーンさんが近づいてきてます!』

「ママジ?」

ヒュッ!

避ける。

「バンク!」

バンク『飛ぶんでしゅね!』
るからね…ユニコーン!」

(姿がばれ

「ユニコーン』ある程度の処置は済みました。良いですよ。」

「行くよ!」

「ヒョンッ!

「ヒソカ」?!」

マロンの姿が消えた。

レオリオ「加勢しに

!・・・って居ない?!」

なぜか、不機嫌なヒソカから一発を食らう事となったレオリオ；（
無念!）

「ゴン」?」

ヒソカ（残念

VV）

（うわぁっ?!）

ドサッ!

「サトツ」?!」
の近くに落ちた。

なぜか、サトツ

「痛い；・・・あ；すみません；サトツさん；」

「サトツ」・・・一体、どうなって?」

「分

かりません；それでは!」

そう言い、サトツの居た木の上から降りて、受験生に混ざる。

（ハア・金髪の子と、黒髪の男の子・・・無事かなあ?）

「キルア」!バロン!何時の間に戻ってきてたんだ?!」

「つい、さつき。キルアは無事か？」
キルア「ああ。ゴンは？」

「・・・置いて来た。」
キルア「?!何で?!」

「うん?これも試験だ。ヒソカの注意だけは轢き付けといたただけ戻ってきた。」

キルア「・・・。」
「もう、俺に近づくな。」
スツ

キルア「?!バロン?!」
「嫌われたかなあ?」

ヒソカ「やあ」
「ひいつ?!」
ズイッ

ヒソカ「クツクツク。君、一体、何者だい？」

「あ;レオリオ君。・・・生きてるよね？」
ヒソカ「うん それで？」

「・・・ここでは話せない。」
プイッ

ヒソカ「でも、君自身も良く分かっていないんだろっ?」

「そう。何時の間にかこの力は使えてたし。けど、ヒソカはこれが何か分かってるの?」

ヒソカ「多分ねvV」(無自覚でこの念の力。これは・・・欲しいねえ)

「?どうしました?」

ヒソカ「ねえ?

僕が君の力を見ようか?」

「・・・もっと、ましな方、居ませんか?」

ヒソカ「僕じゃ嫌かい?」

「はつきり言ったら:」

ヒソカ「クツクツクvV」

ユニコーン『・・・主。離れませんか?』

(だね:)

ヒソカ「・・・本当にユニコーンだ。」

ニコオツ

「?!」

バツ!

ヒ

ソカ「・・・見えるよ?」

「う・・・そ:」

ズザッ

後退する。

ヒソカ「クツクツク。これでも、嫌?」

「・・・嫌。」

ヒソカ「クククツvV気に入ったよ」

「・・・俺、男だから:」

ヒソカ「本当は、女の子なんだろう？」
試験始まるから行く。」

「忘れた。」

ヒソカ「・・・団長に報告しようv v」

(・・・だぁー！怖かったー！)
ンク『大丈夫でしゅか？』

バ

(何、あの人？；；・・・皆、見えるの？；)
ユニ『どうでしょう？』

「コッコッ」

(ああ！早く、生まれー！)
ゴッ！

キッ

ユ

(始まる！)
ニ『気をつけて下さい。』

メンチ「どう？ブララ？お腹の調子は？」
ブララ「いい感じ。」

メンチ「第二次試験は料理よ！」
料理か；苦手分野かも；)

(

第二次試験に差し掛かった！

いいハンター

(豚ー豚豚豚ー)

心の中で歌い

ながら、豚を探すマロン。

(豚がねーいっぱい居るよ…)

豚「プギャー……ッ！」

(さてと、どうしようかなあ…)

豚の大群が近づいている。

(よし、行くか！)

ヒュッ！

豚「プギャー！」

(あ

れに潰されたら死ぬな。)

ドゴッ！

豚「プギャー……ッ！」

ドサッ！

(けど、弱点がバレバレだ。大きな角で頭を守る。その頭を攻撃すれば良いだけだ。)

豚を全匹、倒した。

(さてと。イフリート。)

イフ『ああ？…嫌だ。』

(あ。そう。シヴァ？)

イフ『脅すなよ…やりゃー、良いんだろ？…糞…』

(・・・ユニコーン。口が悪いのはきつとイフリートの所為よ?)

ユニ『イフリート?』

イフ『・・・直します!』

ポッ!

豚を適度に焼いた。

(よし。持つて行くのは一匹で良いよね?)

狐「キューンッ。」

(・・・まあ、この森には熊や野生の動物が居るだろうし、置いておくか。)

そう、思い、一匹豚を担ぎ、戻った。

ブハラ「美味い!これも美味しい!うん!焼き方が丁度、良い!」

(・・・凄い量、食べてるよ?。)

メンチ「あんた、それじゃー、試験にならないでしょ。まあ、いいわ。次は私の試験内容よ?お題は“寿司”よ!」

(・・・寿司?なに、それ?オーデイン?)

デイン『ジャポンという所に知られる料理ですが、魚が必要です。』

『

(魚ねー。兎に角、川にでも行きますか。)

スッ

(・・・来て見たはいいものの、汚い川。シヴァ。綺麗にできる?)

シヴァ『もちろんです。けれど、綺麗にして何をするのですか?』

(魚釣り。けれど、ゴンみたいに釣り道具はないしなあ。)

シヴァ『・・・兎に角、綺麗にしちゃいますね?』

(うん!お願い。)

シヴ

ア『水よ。美しく潤え。』

サラアツ

さっきまで汚れていた川

の水が綺麗になっていく。

(わあー!ありがとう!シヴァ!ユニコーン!入ろう?)

ユニコーン『・・・魚を取るのでは?』

(だって;・・・ね?)

ユニ『・・・おや?なんですか?あれは?』

ジッ

(?何?)

狐「キューンッ。」

(ちっきの?)

熊「ぐわあっ!」

ばしゃんっ!

「!」

魚「びちびちっ?

「!」

「あゝ魚。」(さっきの豚のお礼・・・かな?) 「ありがとう!」

狐「コンッ!」

タタタタッ!

(・・・)

【昔の記憶】

ジン「マロン。知ってるか? いいハンターは動物に好かれるんだ。」
そう言っているジンの周りには色々な動物が寄ってきている。

「知ってるけど・ジンさんが居たんじゃ寄ってくる者も全部そっち
行っちゃっよ!」

ジン「そうか? マロンが気付かないだけで、ちゃんとマロンの側に
居るんだぞ?」

「えっ?」

ジン「・・・ちや

んと周りを見てっらん。」

「?????」

【現在】

(あの時は分からなかったけど、ジンさんは私の事を好いてくれる
動物もちゃんと居る。お前もいいハンターになれるよ。って言おう
としてたのかも)

熊が取ってくれた魚を持ち、試験会場へと戻る。

(よし。?あ。)(「キルア!」
ッ!

タ

キルア「バロン？どうした？」
魚。いらぬい？」

自分のキッチンに置いてある、大量の魚を見せる。

キルア「・・・あれ、全部、バロンが取ったのか？」

「いや。違う。けど、俺、一匹でいいからさ？要るならやるけど？」

キルア「本当？貰えると嬉しい。」

「いいぜ。」

えっと、他の子の分も；」

キルア「？・・・ああ。持つて行く。バロンも一緒に作ればいいだ
ろう？」

「いい；迷惑かけたくないから；」

スッ

キルア「・・・待てよ。バロン！」
タッ

「ん。魚。俺から貰ったなんて言うなよ？」

キルア「何で？」

「何ででも。ほら。持つて行った。」
ア「・・・ありがとう。」

キル

タッ！

ユニ』・・・世話

好き。』

(五月蠅い；仕方がないでしょう？本当に一匹でいいもん；捨てるのは嫌だし？)

ユニ『はいはい。そうですか。さばかないのですか？』

(さばくよ；)

そして、魚

に包丁を入れる。

(新鮮だから、腸をとって、鱗もとって、血を綺麗に洗い流して・・・？)

ディーン『確か、一口サイズに切るんです。骨以外の部分を。』

(茹でたりしないの？生のまま？)
ディーン『生のままです。』

29

(ええ？そういう物なんだ；知らない；一口サイズって人によらない？)

ディーン『約でいいです。』

(はいはい；)

適当に一口サイズにさばく。
これを？)

(・・・)

ディーン『ご飯の上に乗せるんです。因みにご飯も一口サイズ。ジヤポンでは握ると言われるそうです。』

(握る？・・・おにぎりみたいに？)

デイン』それは？』

(・・・魚を乗せれるように・・・かどつたるつ?)

一応、ご飯を握ってみる。

(・・・これ

じゃー、食べ難いかも?)

ご飯を握りながら考える。

(一口サイズ

で収まりやすいサイズ?)

もう一個、握る。

(これぐら

い?それに魚を乗せる。)

乗せてみて、形やらを見やる。

(・・・これが寿司?)

まだまだ、いびつな寿司が目の前にあった。

(・・・他にヒントはないのかなあ?)

試験官を見やる。

(・・・あれ?手にお箸を持つてる。・・・お箸で食べる料理でさらに一口。そして、箸で摘めるような柔らかさと固さで、小皿の中に入っている醤油を付けれる大きさ。)

メンチの様子を伺い、考えた一品を作り出した。

やりました！

そして、ようやく、納得のいく一品を作り出し、試験官へと持っていく。

メンチ「あら？一番乗りが男だとは思わなかったわ。」（それも、かなりのイケメン！）

「色々と試行錯誤を試してみた結果、これが出来ました。」

カタンツ

メンチ（形は良いわね。後は。）

パクツ

「・・・どうでしょうか？」

メン

チ「驚いた；美味しい；」

「それは、良かったあ；貴方のヒントを頼りに、一生懸命、作ったので；」

メンチ「私のヒントだけでこんなに美味しいものを？；」

「失敗作もかなり多いですけど；けれど、残すのは悪いので、俺が食べますけど？；」

メンチ「・・・あなた、名前は？」

「？・・・」

・バロンといます。」

メンチ「合格よ；洞察力に、研究力に努力；それで生み出した寿司

は天才的ね；」

「お褒めいただき光栄です！それでは、俺は戻ります！」

ぺコッ！

メンチ（・・・婿に貰おうかしら？）

ブハラ「メンチ？；」

ブハラはなんとなく、メンチの考えている事が分かってしまった。

（さてと、残飯整理でもしますか！）

カタタタタッ！

見事な包丁裁きで魚を叩いていく。

メンチ（何を作って？）

「・・・あの？お湯って使って良いですか？」

メンチ「?!・・・ええ；いいけど；何を作るの？」

「?お茶漬けです！メンチさんもどうですか？」

ニコッ

メンチ「そうねえ。」

ブハラ「メンチ！」

メンチ「分かってるわよ！・・・ちよっと、言ってみただけじゃない?；

」

「あ；仕事中でしたね；すみません；」

お湯を沸かし、かける。

パ

「いただきまーすVV」
クパクツ！

メンチ（ああ・美味しそう・）

ジュルツ

（美味しい！これが、お茶漬けか！）
勢いよくかつこむ。

（ふう！お腹いっぱい！他の人たち、戻ってこないなあ。）

チラツ

（・・・寝るか。）

スツ

メンチ「ってバロン！・・・寝るの？」

「あ。はい。長引きそうなので；・・・いけませんでした？」

キョトンツ

メンチ「／／／／／ まさか！お・・・おやすみなさい！」

「はい。おやすみなさいVV」

クテツ

そう言ったバロンは、とても早く寝付いた。

そして・・・周りが寄りいつそう、騒がしくなった頃・・・。

「ンンッ?・・・何があつたんだ?」

ムクッ

メンチ「悪い!お腹いっぱいになっちゃった!」

「あ。もしかして、試験終了?」

キルア「あ!バロン!・・・それがよ?一人しか試験合格者、居ないらしいんだ!」

「へえ!凄いな!誰だろう?」

メンチ「だから、何べんも言ってるでしょ!私の試験合格者は302番しか居ないわ!」

「・・・302番?・・・俺?」

キルア「・・・どうやってどう聞いてもバロンだと思っけど?」

「俺、そんな事、聞いてない!皆が落ちるなら俺も落ちる。」

キルア「ってどんなんだよ?!」

メンチ「バロンVV 貴方は合格よ?」

「・・・断ります。」

メンチ「・・・え？」

他受験者「・・・ええええ?!」

「・・・俺だけ、ここで受かっても楽しくないし、嬉しくないの。
」（ましてや、ゴンの夢を私が見たら意味がない。）

メンチ「そんなあ。」

ネテロ「メンチよ。合格者一人とはちよいと厳しすぎるんじゃない？」

レオリオ「な・・・なんだ?!」

ヒュウツ

ドゴツ

ネテロ「ホッホッホ。それに、たかが料理に力を入れすぎなのでは？メンチ？」

メンチ「っ；；；すみませんでした；試験官失格です。」

「そんな！メンチさんはとてもいい試験官だと思います！俺はメンチさんが居なくなるのは嫌です！」

メンチ「っ！バロン！」

ネテロ「そうさのお？他の試験をこの者達に与えてみては？」

メンチ「他の?・・・それでは、ゆで卵!」

「ゆで卵!俺、大好きです!」

ニパツ!

メンチ「//////// もう一回、言って!」

「?ゆで卵!俺、大好きです!」

ニコツ!

メンチ(くうっ!//////// 可愛い!抱きしめたいわ!)

避ける姉

あれから、私達はゆで卵を作るために断崖絶壁へと来ていた。

「ひゃー。かつこいい！この下に卵があるんだ！」

キラキラッ

二十歳には見えない綺麗な笑顔で、崖の下を眺めている。

メンチ「この下に蜘蛛の卵があるわ！それをとって戻ってくれば合格よ！」

「俺もいく！」

メンチ「え？！バロンは私と一緒に……。」

「メンチさん。俺の有志を見ててください！」

ヒュッ！

キルア「俺も続け！」

ヒュッ！

「わあ！すごい量！」

キルア「よ！バロン！」

スタツ！

「来たんだ！キルア！これが、蜘蛛の卵らしいよ！」

キルア「みたいだな！……！おい！バロン！後ろ！」

「?!」

蜘蛛「ぐわああああ！」

「……ありやりや……。来たね。」

キルア「何、やってるんだ！バロン！行くぞ！」

「……先に行つてて？こいつを足止めする。」

キルア「?!お前！何を言つて?!」

「だって、どう見たって私を狙ってるでしょ？…キルアに被害は出させないし、こいつにも怪我を負わせない。」

キルア「……バロン？」

(さあ……自分を試す時が来た……。)

ドクンッ！

ジン『いいか？マロン？……お前がその力を発揮するのは……いつかちゃんと見切つて発動させるんだ。』

(……ごめんね? ……ジンさん。 ……私、こんな処で使っ
ちやう。)

ヒュウツ!

風が吹いてくる。

キルア「 ……上で待ってるからな?! 」

ヒュツ!

「 ……了解。 」

ニツ

蜘蛛「ぐええええええ! 」

ヒュツ!

蜘蛛が私へと向ってきた。

「時を止めて ……? 」

ヒュウツ!

ピタッ

蜘蛛が ……周りの時を止めた ……。

「 ……ごめんね? 」

ヒュッ！

上へと向う。そして、時は動き出した。

(・・・ほぼ完成……。けど・・・これは体力・・・減る。)

ドサッ！

キルア「！バロンッ！」

キルアの声は・・・気絶する前に少しだけ・・・聞こえた気がした・
・・・。

あれから・・・飛行船に移ったらしい。

「・・・んっ・・・んんっ；・・・あれ？・・・ここは？」

ムクッ

キルア「あ。目が覚めた。」

ゴン「すっごく、よく寝てましたよ？」

ジッ

「！ゴン君！・・・ああ、迷惑をかけたようだね。」

ムクッ

キルア「いや。にしても、軽いな？バロン？」

「……ってキルアが運んだの？・面目ない・それじゃー、俺、他の所にいく。」

スッ

ゴン「……なんで、バロンさん。俺を避けるの？」

「！……何の事だい？ゴン君？」

ジッ

ゴン「……ヒソカから、レオリオやクラピカを助けに最初に行った時も、その後の試験も、俺を避けていた。……なんで？」

キルア「話せば？本当の事？バロンには……。」

「キルア！……余計な事を喋るな。」

キッ

キルア「は？何で？……まあ、話したくないんだったらいいんだけど？……」

「……俺は、ゴン君を避けた覚えはない。だが、近づく気もないんでね。」

キッ

ゴン「……分かった。ごめんなさい。」

k i s s m e p l e a s e

そう言ったゴンは立ち去って行った。

キルア「・・・どうしたんだ？バロン？お前・・・変だぞ？」

チラッ

「別に。・・・ゴンの所に行って良いよ？」

スッ

キルア「って、バロンはどうするんだ？」

「・・・分からない。・・・疲れてるし、もう一眠りしようかな？」

キルア「・・・俺になんか、隠してる？」

「？何を？」

キルア「分からない。けど、ゴンには話さず、俺には普通って変じやん？ゴンは俺よりも人懐っこいだろ？・・・なんで、避けるんだよ？」

「・・・やっぱり、バレバレ？」

キルア「ああ。話してみるよ？」

「・・・まだ駄目なんだ；・・・本当にごめん；」

キルア「……辛かったら見えよ?」

「サンキュ。」

そう言って、キルアはゴンの後を追っていなくなった。

(……駄目だねえ；あの年の子に近づいたら、ばれるのは私が良く知ってる；やっぱり、少し距離を置くか?；)

ヒソカ「バ・ロ・ンvV」

ヒョイッ

「わぎゃっ?!……ヒソカ；……なんか用?；」

ヒソカ「クツクツク 君、ゴンとはどんな関係なんだい?」

「……義理の姉弟。って、何で、ヒソカに教えなきゃいけないの?；」

ジッ

ヒソカ「ゾクゾクゾクツ ねえ?……さっきのゆで卵の時。何で倒れたの?」

「疲労。って、顔近いんですけど……」

ヒソカとマロンの顔の距離は10cmもない。

ヒソカ「・・・マロンって無意識に男を誘うの得意だろ？」

「・・・は？」

チュツ

「?!むうつ?!..」

ドンドンッ!

マロン(バロン)は、なぜか急にヒソカから、猛烈な口づけをされた。

クチュツ

スルツ

「舌まで入れる?!//// 普通?!////」

ゴシゴシッ

私は唇を自分の袖で拭き取る。

ヒソカ「クツクツク。・・・どうやら、キスは初めてじゃないようだね？」

「どうだって良いでしょ?!近づくな!」

キシシャーッ!

ヒソカ「アハハハ!本当にそそられるよ。・・・寝るんなら僕の所

に來ないかい？」

「行くか!？」

バツ

ヒソカから距離を置いた・・・その時。

ドンツ!

「?!あゝごめんな・・・ギヤー?!」

ギタラクル「カタカタカタツ。」

「3・・・301番?」

目の前には針山男・・・301番が居た;

ヒソカ「ちよつと。ギタラクル。その子。僕のお気に入りなんだ。返してよ?」

ごうっ!

殺気を思いつきり出す。

ギタラクル「カタカタカタツ。」

「・・・嫌みたいです。」

ベーツ

ギタラクルの後ろに隠れながら、ヒソカに舌を出す。

ヒソカ「・・・その唇にキスしたばかりだから、その舌がどの位、僕に反応するか・・・。」

「だあああ／＼／＼／＼！喋るな！変態！」

キツ！

ヒソカ「ギタラクルは怖くないのかい？」

「・・・なんでだろ？姿や外見はともかく、拒絶反応が出ないから。」

ヒソカ「・・・僕には？」

「出る！だから、近づくな！」

キシヤーツ！

ヒソカ「・・・少し落ち込む。」

「フンツ！・・・あの・・・ギタラクルさん？・・・どうして助けてくれるんですか？」

拒絶反応は起こさないが、やはり恐々と話すマロン。

ギタラクル「・・・俺も興味を持ったから。」

「・・・私って変なんですか?」

ギタラクル「・・・そうとう?」

「それじゃー、ギタラクルさんだって変ですよ!そんな格好する意味があるんですか?私みたいに簡単に変装はできないんですか?」

ギタラクル「・・・へえ?変装だって分かるんだ?」

「一応。けど、何で、変装してるかまではわからないよ?」

ヒソカ「イルミはね。痛いのが好きな変態だからVV」

「・・・絶対に嘘だ!」

トリックタワー

私はあの後、寝る事が出来ず、次の試験場へと降り立った。

リッポー『ここは、トリックタワー。一週間以内に地上に降り立てば合格だ。』

(一週間か。……どうやって降りるんだろ?)

ヒソカ「バロンVV」

「?何?」

ヒソカ「……下で会おう?」

カタッ

ヒュッ

(?!……仕掛け扉。……ヒソカ、わざわざ私に?)

ヒソカが私の事を思ってくれたのに……少し悪寒が走った;

(……よし!行くか!ゴン。キルア。……頑張つてね?)

カタッ

ヒュッ

ドサッ

「ブフツ?!」(…………だ…………誰か居た?;)」

ギタラクル「カタカタカタッ。」

「…………あ。ギタラクルさん。今日は。ここは二人のみなんですか?」

ジイッ

ギタラクル「カタカタカタッ。」

「それで…………悪いんですけど、胸を触っているのは離して下さい。」

パッ

ドサッ

「すみません。あの…………変装を解かないんですか?」

ジイッ

イルミ「…………解いていい?」

「いいよお?」

ズルッ

「うわぁ…それ、子供の教育に良くない抜き方だよ?…」

そして…………。

イルミ「すつきり。」

(うわぁ／＼／＼／＼綺麗な顔。)
「あの、何で、変装なんてしてるんですか？」

イルミ「・・・進みながらいい？」

タツ

「・・・それで・・・なんで？」

チラツ

イルミ「・・・弟が試験を受けてるんだ。」

「あ！私も！義理のだけど・・・名前は？」

イルミ「キルア。」

「・・・似てないねー」

イルミ「・・・バロンの弟の名前は？」

「私はマロンだよ？義理の弟の名前はゴン。」

イルミ「・・・仲、悪いの？」

「まさか・弟離れをするために・イルミさん？は？」

イルミ「……イルミで良いよ？俺は……弟を連れ戻しに。」

「……家出してるの？キルア？」

イルミ「正解。困るよねえ？親とか半殺しにしたらしい。」

「?!……それが……悩んでたのは……」

イルミ「……何か聞いたの？」

「うーん？特には……けど、悩んでるんだなあって……」

イルミ「……キルアの事、好きなの？」

「?……弟としては好きですけど？守ってあげたいって感じ？」

イルミ「……余り近づかないでもらえない？」

「それは私の自由ですよ？それに、キルアを縛り付けるのは家族でも許されない事なはずですよ？」

ニコッ

イルミ「……変なの。」

「そうですかあ?……」

私達は進みながら、敵を倒していく。（もちろん、殺してない）

「……だいぶ進みましたけど……分かり道です！」

イルミ「見れば分かるよ。」

「……ですよねー?」

シクシクッ

イルミ「……どっちに進みたい?」

「……左。」

イルミ「それじゃー、右で。」

「?!……イルミさん。……私の事……嫌いでしょう?」

シクシクシクッ

イルミ「……別に。行かないなら、担ぐけど?」

「行きますけどー……なんだか、イルミさんって、私を虐めるの好きになってません?ヒソカさんに似てきてますよ?」

イルミ「……俺が?嘘だ!」

「うわっ……めっさ、棒読み!もう良いです!行きましょう!」

イルミ「……だって、君って俺よりも年下だから、妹が出来たみたいで……少し虐めたくなるんだよね?」

「……確かに二十歳ですし、妹と思われても仕方がないほど子供

っばいけど・イルミさんの妹は・・・嫌ですー。」

プリプリッ

ちょっと、怒りながら、前に進んでいく。

殺人鬼とのギャグ；

イルミ「・・・俺もマロンが妹は嫌だなあ？・・・犯せなさそうだし？」

「・・・ブフツ？！何を言っちゃってるんですか？！／／／／／イルミさん？！」

バツ

イルミ「・・・だってさ？俺、弟いっぱい居るけど、その誰かの婚約者となつて、結婚されでもされたら、皆、執着心強いだろうから、犯せないよなあつて？」

「／／／／／イルミさん！それ、真顔でセクハラ発言は止して下さい！・・・幾ら、私でも引いちゃいますよ？！／／／／／」

イルミ「え？だって、俺、マロンの事、気に入ったし？妹になつちやったら手出しできないじゃん？」

「だーから！・・・私は、イルミ家の誰かと結婚する仮定で話すの止めてもらえませんか？！」

イルミ「・・・ヒソカの奥さんも嫌だよ？」

「私だって、あの人の妻は嫌です！；」

二人は、囚人をなぎ倒しながら、そんな面白い会話を繰り返して前へと進み続けていた。

そして……。

ガシャンッ！

「？……何？」「」？」

ジイッ

ザルク「クククッ。随分とかわいこちゃんが居るじゃねーか。ケケケ。」

「……うえ、気持ち悪い奴が出てきた！」

イルミ「……あんな奴とも結婚して欲しくないなあ。」

「もういいから、お兄ちゃん思考止めてよ！」

リップポー「そこに居る囚人たち5人と、君達二人はデスマッチをしてもらう。」

「……あの、どちらかが死ぬまで続ける奴？」

リップポー「そう。そして、二人とも、一回は闘わなければならない。それに、少しでも傷付けられれば、君達の時間は奪われ、そいつらは晴れて自由の身となるって訳だ。」

「なるへそ。……人を殺すのは嫌いだけど、やらないと進めないしね！」

キース「クツクツク。俺は女をやるぜ？」

ウォン「ずるいな！俺にもくれよ！」

ベーン「あの女の体を引き裂いたら、どんなに綺麗な肉が飛び散るんだらうなあ？ヒヒヒ。」

ユベル「おいおい。肉にしたら、他の事に使えないだろ？先に俺だな！俺を体に叩き込んで鬺り殺す！傑作だ！」

ザルク「それよりもあの女。俺達を見て、怖気づいても居ない。ああ。見てみたいなあ。あの顔が、苦痛で歪むのがvvvv」

「・・・判明。どいつもこいつも気持ち悪くって、自分の罪を罪だと思わない馬鹿しかいない。」

ベーン「言ってくれるね！。その口の中に納まってる小さな舌は俺のコレクションに追加してあげるvvv」

「ゾワツ；・・・イルミ。先に行ってもいい？こんな奴ら、見てるのも触るのも嫌だ；」

イルミ「いいよ？けど、無理しないでね？あんな奴らの血にも汚れて欲しくないし・・・なにより奴ら念能力者だ。」

「？念？」

キース「ひゃーひゃひゃひゃひゃひゃ！あの女、念能力者も知らないぜ？なんなら、俺達が、手取り足取り、腰取り、体取りを教えるぜ？ひゃひゃひゃひゃっ！」

「・・・ねえ？一番手。誰？早く済ませて欲しいんですけど？」

ユベル「それじゃー、やっぱり俺だろ！体がガクガク言うほど鳴かせてやるぜ！」

スタツ

リッポー『・・・試合、始め！』

ユベル「てやー！」

ヒュツ！

ウォン「いつけー！殺せー！」

キース「俺達の前で犯し殺してやれ！」

ザルク「・・・?!ユベル！下がりやがれ！」

ベーン「?どうしたんだよ？ザルク？」

ウォン「まだ、試合は始まったばかりだぜ？止めるには惜しい。」

ザルク「馬鹿野郎！見て分らないのか?!あの女!・・・念を理解してないだけで・・・そとうの念使用者だ!」

キース「?!なんだって?!」

4人が、再びマロンとユベルの戦っている競技場を見渡すが・・・

ユベルの姿だけ消えてなくなっていた。

ベーン「……ユ……ベル?」

ウォン「……おい?!女?!……ユベルを何処にやりやがった?」

「……ギャーギャーうるせーな。あの男なら、俺の胃袋の中だが?」

ニタアッ

そう言ったマロンの瞳は、深い深い闇の色へと化していた。

キース「……う……嘘だろ」

「まあ。直接、口に入れるなんて、汚いマネはしてないが……。」

ドシヤッ!

マロンが何かを続けようとした瞬間……血と骨と衣服しか残っていない何かは何処からともなく降って来た。

ザルク「うげえっ……肉の……塊?」

「ああ。流石にまずすぎた所為か、殆ど消化できないまま出てきやがった。糞」

ベーン「……お前は一体……何者なんだ?」

「・・・俺は、ドルチエ。何でも食うのが好きなんだが、こいつ自身では食えないから、時空の中で食ってやったのさ。時空の腹もこいつの不味さには嫌気がさしたみたいだがな？」

ニヤッ

ウォン「化け物！」

眠りに落ち……

「ハッ?!……化け物……だと?……お前らにだけは……言われたく……なかつたな。」

ドサツ!

イルミ「?!マロン?!」;

マロンは会場ど真ん中で、倒れてしまった。

イルミ「?!マロン!早く、目を覚まして!」

リップー『言い忘れてましたが、リング内で倒れていて、生きている状態なら、次の人物に回します。』

ザルク「ヒャーハッ!行くぜー?!小娘!」

バツ!

イルミ「マロン!」

ヒュウツ!

イルミ「?!」

キース「?!なんだ?」

シヴァ『……あら?……主は眠っているのですね?まったく。』

無茶をなさる。ドルチェが勝手に出るからですけどね。』

さっきまで倒れていたマロンは、髪の色が水色となり、耳も尖がり、瞳の色も綺麗な水色となっていた。

ベーン「……一体……どうなって?..」

シヴァ「……審判さん?体はマロンのままなので、今からここを離れてもよろしいですか?』

ジッ

リップー「……ああ、構わない!..」

シヴァ「それでは、私は退場しますわ。イルミさん……でしたよね?後はお願ひします。』

スッ

イルミ「……了解。」

ザシュツ!

4人「ぐわあっ!..」

そして、残っていた4人の男達を瞬殺した。

シヴァ「……イルミさんには悪いのですが、私はこの姿では進めません。なので、マロンさんを運んでもらいたいのですが?』

イルミ」「・・・いいよ?」

シヴァ『頼みます。』

ヒュウッ

ドサッ

そして、マロンへと戻り、イルミへと倒れこむ。

イルミ「?!マロン?!」

「・・・スー・・・スー。」

マロンは心地良さそうに、イルミの腕の中で眠る。

イルミ（・・・寝てる。・・・相当、力を使いすぎたんだ。）

スッ

ゆっくりと抱き上げて、進みだし、その振動も酷く静かな物にした。

そして、トリックタワーを抜けた。

リップー『302番。301番!共にゴール!二位と三位です。』

ヒソカ「お帰り。イルミ。・・・マロンと一緒にだったんだね?」

ジィッ

ヒソカは、イルミの腕に抱かれ寝ている、マロンを眺めながら言う。

イルミ「・・・起こさないでよ？・・・疲れてるみたいなんだ。」

ゆっくりと座り、マロンが寝やすいようにする。

ヒソカ「・・・イルミのそんな細い腕に抱かれて寝るよりも、僕の腕の方が良いんじゃないのかい？」

イルミ「五月蠅い。・・・黙って。」

ジッと、マロンの顔を除きこんだまま、イルミはぴしゃりとヒソカにいう。

ヒソカ「・・・惚れたね。イルミ？」

イルミ「?!・・・そうかもね。・・・妹っばいって思ってたけど、無理したりするのを見て、守ってあげたいって思ったから、まさかとは思ってたけど・・・惚れたかあ。」

殆ど、無表情だが、マロンを見て居る時にだけ、酷く柔らかい顔をしていた。

ヒソカ「・・・彼女は、不思議すぎるからね？・・・誰かが、支えなきゃ。壊れそうだ。」

スッ

パシッ！

ヒソカがマロンに触れようとしたので、イルミは、蚊を叩き落すように叩く。

ヒソカ「……クツクツク。痛いじゃないか？イルミ？……もうそろそろ変装しなきゃ、正体がばれるんじゃない？」

トリックタワーから人がやってくる気配がする。

イルミ「……。」

ヒソカ「……両手を使うのに、マロンを支えられるのかい？」

ニタアツ

イルミ「……マロンも起こして、変装させなきゃ。」

ヒソカ「見えなくすれば良い」

そういつて、ヒソカはマロンに何かを被せて、自分の膝に寝かしかけた。

ギタラクル「カタカタカタッ。」

ヒソカ「返せって？その格好で、怪しまれないのかい？マロンと一緒について？」

ニヤニヤッ

ギタラクル「……カタカタカタッ。」

スッ

ギタークルはヒソカに何かを言い離れる。

ヒソカ「クツクツク。随分と執着してるねえ。・・・一体、イルミに君は何をしたんだい？」

いまだに自分の膝を使い寝ているマロンを“薄っぺらな嘘”で隠した人物を見やる。

森の中での密会

そして、ある程度、時間がたった頃……。

ヒソカ「……マロン？……マロン。……起きないと襲っちゃうぞ？」

「ビヤツ？！……あれ？……なんで、私、ここに？」

ジイツとヒソカを見やり思う。

ヒソカ「気絶して、眠ってたんだ。姿は隠しといたけど、変身しないとばれちゃうよ？」

「？！本当だ！……」

そう言つて、バロンの姿へと戻つた……その時！

ゴン「うわあああー！」

ドサドサッ！

「！ゴンとキルアたちだ！……あれ？何で、こんなに人が集まつてるの？」

ヒソカ「だって、もう試験は終わりだ。」

「……えええ？！私……そんなに長い間、寝てたの？」

ヒソカ「うん 眠り姫みたいだったから、もう少しでキスをする所だったよ?」

ニコオツ

「……って?イ……ギタラクルは?」

チラッ

ギタラクル「!……カタカタカタッ。」

「よかったあ。……って……二人とも受かってるからここに居るのか。」

そう言っつて、胸を撫で下ろすマロン。

ヒソカ「……ねえ?マロン?イルミの事、どう……。」

リップー「ええ!では、次の試験会場へと向います!ゴールした順に、森の中に入ってください!」

ヒソカ「……面倒だなあ。」

スッ

ヒソカはそういいながら、ナンバープレートを引き、森の中へと消えていった。

「?ヒソカ……何を言いかけたんだろう?」

リップー』302番！ナンバープレートを引いて、森へ！』

「……つて！俺は二番手?!……イルミ:」(自分を連れて、急いで外に出たであろう彼を見やる)

ギタラクル「頑張つて”。」

イルミ(ギタラクル)は、口の形で、そう言った。

「!……。」

タツ!

ヒュッ!

そして、マロンも森の中へと消えた。……が。

ポフッ

ヒソカ「やあ 待つてたよ」

なぜか、少し進んだ所に、ヒソカの厚い胸板が……。

「……なんで、こんな所に居るんですかあ?」

もう、諦めたといわんばかりに、言うマロン。

ヒソカ「言っただろ?待つてた。つて。……ね?何で、あんなに疲れてたんだい?」

ジィッ

「多分、私が操りきれない奴が勝手に出てきたんだよ。」

ヒソカ「操れない？」

「うん・私だって、この力を完璧に使えるわけじゃないから。」

ヒソカ「！使えないの？」

「うん・どつちかっていうと使えないのが多いくらい・私の知らないのも居るし？」

ヒソカ「・・・知って居るので、使えないのは？」

「?・・・うーん；フェニックスとペガサスは使えないなあ。」

ヒソカ「へえ “フェニックス” に “ペガサス” かあ。」

「あ！イルミ！」

ヒソカ「?・・・なんで、来たのさ？イルミ？」

「睨まなくつても良いじゃん！ヒソカ！あ！トリックタワーの時、ありがとうvv」

イルミ「・・・別に。・・・もう平気なの？」

イルミはそう聞き、貴方の顔を覗き込む。

「うん！平気！本当にありがとう！ここで受かんなかったら諦めて

たよー！」

イルミ「え？・・・諦めないですよ。期待してるんだから？」

「マジ！嬉しい！イルミにそう言ってもらえるとなんだか元気になるvv」

私は、イルミと仲良くなった。

ヒソカ「・・・マロン。番号、何番だい？」

どうやら、気を引きたいらしいヒソカさん。

「？・・・分からない番号だよー；けど、人物は把握してるから、きつと、三兄弟の一人だな！って予想を立ててるの！」

そう、胸を張り言う私。

ヒソカ「すぐに取りに行くの？」

「ううん。何で？」

ヒソカ「僕が、念の修行、手伝ってやろうと思ってねvv」

「・・・遠慮しとく！」

マロンは、大慌てで断る。

ヒソカ「・・・なんで？その力、使いこなしてみたくないの？」

「うん。全然。あってもなくても私はいいし?」

マロンは素っ気無く、ヒソカを振った。

イルミ「・・・俺が教えようか?」

「本当に良いの。お父さんに言われてるの。私のこの力は普通の人と違うから、普通の人に教えてもらうな。って。」

ヒソカ「・・・僕達、普通かい?」

「・・・私よりかはね?;」

そんな会話をしながら、試験は始まった。

キルアとの遭遇

あれから、ヒソカに念についてを覚えてもらった。

学べば、学ぶほど難しい物だと言っのが分かった。

それを私が見えるなんて、思いもしなかった。

イルミがヒソカと自分のナンバープレートを取りに行ってしまった今はヒソカと二人きり；

「・・・ヒソカってさ？どうして私の事、気に入ってるの？」

ヒソカ「・・・自覚はあるんだ？」

「あんまり。けど、当たってるでしょ？」

呆れたように告げる。

ヒソカ「うん。かなりねVV君の義弟にも興味があるよ？VV」

「ええ？・ゴンは駄目？」

複雑な顔をしながら告げる。

ヒソカ「そろそろ受験者、全員、来た頃だね？どうするんだい？いくのかい？」

ヒソカがマロンに尋ねる。

「うん。いく。私もナンバープレートを取りに行かないと！私、ヒソカの事、苦手だったけど好きになれた！ありがとうね？」

にこやかにヒソカに告げて、立ち去ったマロン。

ヒソカ「・・・やっぱりいいねv v」

更に気に入られたマロンはヒソカの様子に気付かずに居なくなる。

(何処だろう？アモリ、イモリ、ウモリだけ？！)

森を詮索して居る・・・と。

キルア「・・・バロン？」

キルアと出会った。

「キルア！久しぶり！何番？」

ニコニコとキルアに問う。

キルア「・・・バロンは？まさか、俺？」

「まさか！・・・アモリだけ、イモリだけ、ウモリって言う奴の番号・・・」

苦笑しながら告げる。

キルア「あ・・・多分、俺もそのうちの一人。」

「良かったー。一人で心細かったんだ！・・・ねえ？ゴンって・・・誰？」

キルアを見つめながら小声で問う。

キルア「？・・・あいつ、運ないんだぜ？ヒソカなんだ！」

「・・・そっか。けど、殺さないと思うよ？ヒソカ、ゴンの事、気に入ってたから。」

キルア「嫌；気に入られてるのは、バロンだって一緒だろ？」

「そうなのかな？あ！けど、キルアも気に入られてるから、いつかはやり合うかも。」

キルア「・・・ああ・覚悟はしとくつもりだよ。」

「んで？どうする？この後。」

キルア「んー？バロンってさ？不思議な奴だよな？」

「・・・突然なんだ？；ヒソカにも言われたぞ？」

キルア「ハハハハッ！ヒソカに言われたら終わりだな！」

「?!そんなに笑うことないじゃんか！」

キルア「だって！変！ハハハハハッ！」

「・・・ねえ？キルアの事も・・・知りたい。」

キルア「……いいぜ？何を知りたい？」

「お？素直。それじゃーね？……誕生日！教えてよ！」

キルア「？……知ってどうする気？」

「？祝うに決まってるだろ！」

ニコリと笑いキルアに告げる。

キルア「……7月7日。」

「ラッキーデーだね！セヴンセヴンなんて素晴らしい誕生日じゃないか！」

キルア「……バロンの……誕生日は？」

「……ない。」

キルア「え？」

「ないって言うか覚えてないんだわ。……生まれてきた時の事、知らない。」

キルア「……聞いたら不味かった？」

「全然！今が、幸せだから！だから、キルアにもちゃんと幸せになつてほしいんだ！」

キルア「／／／／ どうして、バロンは、そんな恥ずかしい台詞が
言えるんだ?」

「ええ?俺は、恥ずかしくないし?にしても、キルアって、身長、
意外と高いな?何ぼ?」

キルア「158cm。バロンは・・・もう伸びないよな?」

「酷くない;伸びたらどうするよ?」

キルア「抜かしたら付き合ってよ?」

「・・・はい?キルア?・・・今の言葉・・・聞こえなかったけど
?」

キルア「・・・バロンの身長を抜かした時、俺と付き合ってよ?」

「・・・キルア:自分が何を言ってるかわかってる?・・・俺、
男だよ?」

キルア「・・・ああ。知ってるぜ?・・・けど、好きなんだよな!。
」

「・・・ん。覚えとく。」

キルア「・・・拒否らないんだな?」

「だって、キルア。本気なんだろ?それを背くつもりはない。」

キルア「・・・もう一つ、バロンに聞いていい?」

「？今度はなんだい？誕生日と星座を聞いても答えられないからね！」

キルア「・・・バロンって実は女だろ？」

「？・・・キルアー；それはないわー；俺が女？！見える？」

キルア「バロンからは女独特の匂いがしてる。ゴンよりかは鈍いけど、ゴンと一緒にいる時はしてない。まるで、ゴンには自分の招待をばらせないように。そうだろ？マロンさん？」

「・・・何時から・・・気付いてたの？」

女言葉に直しキルアを見つめながら小さく問いかける。

キルア「何時からって訳じゃない。おかしいなって思ってたから。ゴンを避けるのが。」

「あー；避けないが正解だったか；」

落ち込みうな垂れる。

キルア「・・・どうして男装を？けど、胸・・・本当にない感じなんだけど？」

キルアはマロンの胸を見つめながら真面目に問いかける。

「そんなに見ないでよ；訳ありなの。」

キルア「！……ごめん・俺、余計な事はつか言って……」

キルアはどつちやら誤解をしたようだが、今はそのままにしておこう。

キルアとのデート？

まあ、あれから色々合ったが、キルアと森の中を見て回っていく。

「・・・どうする？後、付けて来てるけど？」

キルア「あれ？気付いてたんだ？」

バンク『僕が見てきたんだから当たり前でしゅ！』

「勿論！キルアには負けてられないからね？」

笑いながら森の中を歩み進める。

キルア「・・・仕掛ける気はないようだな？」

「こっちから行く？」

キルア「俺はいいぜ。行くぜ？」

言うと二人はその場から姿を消して・・・。

イモリ「お兄ちゃん・やっぱり子供二人をやるなんて！出来ないよ
！...」

ウモリ「けど、アモリ兄ちゃんの言う事を聞かないと怒られるぞ！...」

アモリ「お前ら！子供一人に男一人だけ！何をそんなに言い合って

るんだ！」

「そつだ！そつだ！もつとはっきり行動にしゃがれ！」

アモリ「ほら！敵もこう言ってる事だし！仕掛けるなら今だー！
ー？！……」

キルア「そつそつ。今が一番、仕掛けるならいいよな？」

「うんうん。兄弟喧嘩もいいけど、来ないならこっちから行くけど？」

アモリ「まあ、待て！待ってくれ！ほんの少し相談させてくれ！」

キルア「いいけど？」

「ねえ？私の番号取ったら頂戴？」

キルア「それじゃー、俺の番号を手に入れたら俺に頂戴な？」

「勿論VVもう一人の番号どうする？」

キルア「……貰つとけば？」

三兄弟「待て待て待て！……お前たち！……俺達が負ける仮定で話すな
！……」

「アハハハ。勝つ気にいるんだ？やり合つなら今だよ？」

ニコニコと攻撃態勢に切り替え、アモリ三兄弟に告げる。

ウモリ「くっ…こうなったら！行くぞ！…イモリ！」

イモリ「分かったよ！行くぜー！ー！」

「遅すぎ。」

キルア「俺の番号じゃないや。バロンのは？」

「私のじゃない。キルアのじゃない？」

番号を見せながらキルアに言う。

キルア「あ。そうだ。それじゃー、バロンの番号はこいつか。」

言いながらアモリの背後に回る。

アモリ「?!何時の間に…」

「自分でやるからいいのに…」

キルア「殺さないしいいだろ？」

「そついう問題じゃないのに…」

三兄弟は何時の間にか倒れていた。

キルア「行くぜ？」

「御愁傷さまー。」

いいながら、その場を立ち去る。

キルア「残りの日にちどうする？」

「私は、ヒソカと修行が残ってるし、ゴンの事も聞きたいからヒソカの所に行くよ。」

キルア「?!・・・ヒソカと・・・付き合ってるのか？」

「・・・はあ?!;ありえないし!////」

痛いほどに手を振り首を横に振り告げる。

キルア「・・・それじゃー、他に好きな奴、居るの?まさか、ゴン?」

「・・・違う。ゴンではない。」

キルア「好きな人は居るんだ？」

「居たの。・・・年上の人でね・・・ぶっきら棒で自分の意志を曲げない人物なの。」

キルア「・・・そっか。けど、振り向かせるから?」

「・・・ええ?!;あの言葉、本気だったの?;」

キルア「あれ?嘘だと思った?・・・けど、本気。俺は、マロンが好きだ。」

「／／／ん。覚えとく。またね！」

言っと、キルアから足早に遠ざかる。

(もう！／／／／年下の子は、あんなにも直球かね?! 恥ずかしかったなー／／／／)

キルアの言葉を胸に響かせながら歩いていき……。

「あー? ハンゾーさんでしたっけ? このナンバープレートが必要なんですか?」

ハンゾー「?! ……何時から気づいていた?」

「三人兄妹の後から。どうする? これ、いる?」

ハンゾー「! ……交換条件か?」

「うーん。別にあげるよ。けど、さっきの会話の内容等は内密に願いたい。」

ハンゾー「? ……さっきの銀髪の餓鬼との会話をか?」

「そう。女言葉だっただろう? 実は、俺、オカマなんだ。」

ハンゾー「?! そうだったのか! ……分かった。内密にしよう!」

「流石は忍者。頼りになるよVV」

にこやかに笑いプレートを投げ渡す。

ハンゾー「ゾワッ! ……それじゃーな! ……」

ハンゾーはバロンを怖がり素早く消えてしまった。

「……以外にバロンの姿、使えるなVV」

嬉しそうに森の中を歩いていく……すると。

ヒソカ「マーロンVVもう、プレートは取れたのかい?」

ヒソカと遭遇したVV

最後の試験

「……もう……ヒソカには驚かない事にしたよ。」

目の前に居る奇抜。ピエロを呆れながら見つめ眩く。

ヒソカ「……キルアに女だっけばれたね？」

「何処から見てて言葉の内容を聞いてたの？……まあ、何れかは言つつもりだったし？」

歩きながら考える。

ヒソカ「……告白、あれは本気だよ？」

「うん。分かってるつもり。けど、キルアの事が好きだから今は振れない。」

まっすぐに前を見据えながら決断をする。

ヒソカ「……前に付き合ってた奴ってどんな奴だい？」

「ヒソカに言ったら殺すから駄目。けど、かつこいい人だよ？見た目よりも中身が。」

嬉しそうに、思い人の事をヒソカへと伝える。

ヒソカ「……なんで、別れたんだい？」

「んー？何でつて事はないけど、多分、自然消滅。その人、仕事大好き人間だから；」

苦笑しながら小石を蹴る。

ヒソカ「多分、あと少しで試験は終わる。」

「うん。長いようで短いんだね；」

試験を思いだしながら思い出に浸り告げる。

ヒソカ「・・・終わったら帰ってしまうのかい？それとも、その思い人を探すのかい？」

「アハハハ！あの人を探す気はないよ。けど、まだ何かありそうだし、展開に任せる。」

ハンター「試験を受かったとしても、私はどうしようかなど考えていなかった。」

ヒソカ「それじゃー、いつでもいいから、天空闘技場に来ると良い。僕はそこに居る。」

「天空闘技場？分かった。会いに行くよ。」

ヒソカの言葉に嬉しそうに答える。

ヒソカ「さあ。戻ろうか。」

「待って！イルミにも挨拶したい！起きたのかも知りたいし？」

ヒソカ「さつき、起きていてもう行ったみたいだけど？」

「えー？・・・また、会えるかな？」

ヒソカ「・・・イルミの事が好きなのかい？」

「？・・・イルミも友達としてはね？」

はぐらかすように言うと、ヒソカの前から居なくなる。

ヒソカ「・・・うん ぞくぞくしちゃうよ。」

ヒソカは居なくなった人物を思いながら歩みを速めていく。

「ゴールVVさあ！もう、何でも来なさい！」

テンションを上げながら飛行船へと乗り込む。

すると、目の前にはゴンの友達のカラピカ君？とレオリオ君？を発見した。

(改めてみると、金髪の子って綺麗な顔してるんだ。黒髪の子は、私よりも年下かな？)

ジイツと二人を見つめていると。

レオリオ「げっ・・・302番・・・」

(・・・うん。どうやら、恨まれているみたい・・・)

少し落ち込み気味でレオリオ君に近づく。

「・・・一次試験の時はすまなかった。・・・ヒソカの気しか引けなかったんだ。」

余り良い言い訳が見つからずに頭を下げる。

クラピカ「?・・・ああ。あの時の事なら気にしてませんよ?」

「え?だって、俺見た瞬間に“げっ”って言ったじゃん?」

レオリオ「ヒソカと、301番とも仲が良さそうだったからよ・・・
・殺されるかと。」

「殺す?!ないない;俺、人殺し嫌いだもん;この試験で・・・手
にかけたのは一人だけ;」

少し、沈み気味でレオリオたちに説明していく。

レオリオ「なんだ。怖い人じゃないのか。」

クラピカ「そうとなれば年も近そうだ。仲良くしてくれ。」

「おうっVVそれじゃー、残りの試験、お互いに頑張ろうな!」

言いながらその場を立ち去る。

そして、最後の試験が始まった。最後の試験はトーナメント式の試合。

一度、勝てば合格。そして、この試験では一人が試験に落ちるのだ。

(・・・余り戦いたくないなー。)

戦うのが好きじゃない私はうな垂れてしまっ。

ポンポンッ

(?・・・誰?)

蹲って居る私の頭を撫でてくれた人が居たのに、見た瞬間、誰も居なかった。

(・・・気のせい・・・なのかな?)

自分の髪を撫でながら、立ち上がり気合を入れなおし、前へと突き進み。

(そうだ。私はこんな所で立ち止まれないんだ!)

前を見据えて、歩き続けると決めたあの頃から、私の運命は決まっていた。

それでも、新たに突き進みたい道にそれよつとする私を許してくれますか?

?「・・・。」

そして・・・結果は、キルアの不戦勝と人を殺した事による不合格

となった。

「…………どうして?…」

目の前に居るイルミを少し強めに睨みつけながら問いたです。

イルミ「?言ったじゃん?俺達の家系は殺人一家だって?」

「そんな事を聞きたいんじゃないねー!キルアの意思を無視したのは何故だって聞いているんだ!」

私は無我夢中でイルミに怒鳴りつけていた。

イルミ「?俺達の家的事、口に出すならバロンでも殺すよ?」

「…………構うものか。キルアの闇は俺が救う。そして、キルアを自由にさせる。」

言つと、その場から、風邪のように、バロンの姿は消えた。

キルアへの愛

私は、あれから、試験会場を飛び出して、ゾルディック家のある、ククルーマウンテンへと来ていた。

(・・・怒っちゃった。・・・嫌だな。ぴりぴりして；)

ショックを受けながら門へと向かう。

「・・・でかい；」

目の前にある、ゾルディック家の門へと来ていた。

ゼブロ「？おや。お客さんとは珍しいですな。観光ですか？」

「いいえ。違います。キルアを救いに来ました。」

ゼブロ「？キルア坊ちゃんを？」

「まだ、戻ってないですよね？・・・ご両親は御在宅なんですか？」

ゼブロ「？・・・シルバさんもキキョウさんもいらっしやると聞きましたか？」

「この扉、何か名前があるのですか？入ったら、キルアに会えますか？」

ゼブロ「？！入る？！何を言ってるんだい？！お嬢さん！お嬢さん

が開けれる扉じゃない！」

「・・・何故ですか？」

冷たい瞳でゼブロを見つめ問う。

ゼブロ「；・・・その扉は“試しの門”。そこから入れれば確かにミケに狙われなくてすむが、常人は入れない；」

「・・・問題ありません。試されようが、私はキルアに会いに行きます。」

告げると扉に片手を置き、押し上げていく。

ゼブロ「?!何!；扉が・・・開いた；」(それも、第3の扉・・・それに、髪の色が；)

ゼブロが見て居るマロンの髪の色は、炎の用に赤くなっている。

「これ以上やると扉が燃えるので止めておきます。それでは、失礼します。」

赤い炎の髪を靡かせたまま庭を駆けていく。

ゼブロ「・・・まさか・・・あの子が報告の・・・マロンさん?；」

ゼブロの呟きなど聞こえずに突き進むマロン。

「バンク。大きな建物を探して。大きくって目立つ建物を！」

バンク『はいでしゅ!』

バンクが返事をしながら空高くへと舞って行く。

(早くしないと、キルアが来る。どんな目に会おうと、助けなきや。私のようになる…)

自分の押さなく、暗い闇を思いだしながら、庭を突き進む。

イフリート『おい。マロン。髪の色、元に戻さないのか?』

(何色だって構わない。兎に角、今は、キルアより先に家に着く事が先!)

バンク『見つけました!大きな家!ここから300kmは離れてしゅ。』

「……ユニコーン。」

ユニコーン『……お心をお鎮め下さい。』

「いいから、足への力を貸しなさい!」

自分の中に居る、ユニコーンに向い、怒鳴りつける。

ユニコーン『……分かりました。』

次の瞬間、マロンの足の速さは倍になる。

(間に合え。間に合え!……私は、キルアの光でありたいんだ

！)

泣きそうな顔で走り続ける。

そして、大きな・・・ゾルディック家の家に辿り着いた。

(・・・間違いなさそうだけど、何でか、普通だ。もっと、邪魔が入ると思ったのに。)

マロンが思うのも無理はなく、邪魔をする人がいなかった。

(・・・まるで、私が来た事を知らせたかのような。)

そう。ゼブロさんはマロンの事を知っていたため、通したのだった。

(・・・この扉も、重たいかなー?)

呑気な事を思いながら、扉に手をかける。と、なぜか、向こうの方から、開いてしまった。

「ぎゃんっ！；；；；イルミ；；；；何時、帰ってきたの？；；」

イルミ「ついさっき。にしても、早いね？」

「イルミも早いね。・・・イルミが私の情報を執事さんに？」

見ながら問いかける。

イルミ「うん。入りなよ。」

「くそー；イルミよりも先に来たかったのに；」

悔しがる所は違う物の、ゾルディック低へと入っていく。

イルミ「親父達、まだ仕事が終わってないからキルアに会ってきたら？」

「?・・・良いの？」

首を傾げながらイルミを見つめる。

イルミ「うん。ミルキには俺が言っとくからな。」

「?ミルキって?」

イルミ「俺の弟。ここにキルアが居るよ。」

「入りまーすvv」

キルアが居る事に機嫌を良くしながら、扉を開ける。

ミルキ「イル兄!；・・・後ろの女、誰？」

ミルキらしき人物がマロンを見つめるも、マロンはキルアの元へと行く。

キルア「?誰？」

「あー。この格好じゃ分からないか；」

いいながら、金髪の髪へと変化していく。

キルア「バロン！……え？何で？」

「クスクスツ 助けに来ないとも思った？痛い？」

キルアの体を見つめながら問いかける。

キルア「こんなの……なんでもない。すげー、嬉しい。」

キルアの言葉には本当に嬉しさが滲み出していた。

「……直ぐに、助けてあげるからね？」

ニコリと笑うと身を翻す。

キルア「！待って！マロン！」

「え？」

チュツ

キルア「／／／／……サンキュウ／／／／」

何時の間にか、手枷を外し目の前に居たキルアにキスをされたのは夢だったかも？

ゾル家の家庭訪問？

「・・・なあっ！／／／／ キスしていいとは言ってないぞ！・・・キルア！／／／／」

真っ赤になりながら、キスをしてきたキルアを睨み言う。

キルア「・・・で？どうするつもりなんだ？」

「んー？考えてないVV」

キルア「はあっ？！なのに来たの？！馬鹿？」

「変から馬鹿になった！；酷いなー；・・・けど、いくよ。じゃな
いと意味がない；；」

キルア「だから、行って何をどう言つの？；；」

「成り行きに任せる？」

キルア「・・・マロンさんってそんな性格なんですか？；；」

「ポジティブでいいでしょ？ゴンはこんな感じVVバロンはもう
一人の自分かな？」

ニコニコと説明する。

キルア「・・・あーもう、いいから、俺の事は放っておけ。」

「無理。ゴンの元に戻す。キルアは私の光だから。」

キルア「……は？俺が……マロンさんの……光？」

「うん。……私は闇だよ。けど、キルアはまだ救える。私も、救われた人物だから。」

少し、悲しそうな顔でキルアを見つめながら呟く。

ミルキ「おい。もういいか？」

痺れを切らしたミルキが私とキルアに向い言う。

「……一時のお別れだね。けど、必ず、キルアを救うよ。だから、待ってて？」

キルア「恥ずかしいから早く行けよ；／＼／＼」

「了解VV……待っててね。」

身を翻し、地下拷問室から出て行く。

イルミ「！待って。マロン。」

その場からイルミも離れて、マロンを追いかける。

イルミ「……キルアか俺と付き合えば自由になれるよ？」

「そんな事をしても幸せになれないんだよ。キルアも、私も……それにイルミも。」

イルミを見つめる瞳は、何時ものマロンの物へと戻っていた。

イルミ「……うん。マロンって馬鹿正直ない子だよな？」

「納得しないでよ；なんか、近頃、皆から貶されてるよう……な。」

マロンは少しずつ小声になると前の方から銀の髪をした人がやってくる。

(……キルアに似ている。)

なんとなく、そう思いながら、その人物を見つめる。

イルミ「親父。仕事に一区切りをつけたの？」

シルバ「イルミか。何時、帰ってきたんだ？……それに、その人は？」

シルバの瞳がマロンを捕らえていた。

「……始めまして。マロンといいます。イルミさんとキルア君にはお世話になりました。そのお礼と、キルア君の事についてお話したい事がありやって参りました。」

礼儀正しくもあり、だが、少し、力を込めた瞳でシルバを見つめ言う。

シルバ「……ほう。その髪の色。念か？面白いな。」

シルバはマロンの髪に興味を持ったらしく見つめながら呟く。

イルミ「マロンは姿形も帰れるよ。それに、異性にも・・・ね？」

「・・・はい。ある程度ならば変化は可能です。」

いいながら、髪の色が水色へと変化する。

シルバ「・・・特質系か？」

「系統は詳しく調べておりません。けれど、多分、特質系なのでしよう。」

言いながら、髪の色が茶色へと変化する。

シルバ「本当の髪の色は何色なんだ？」

イルミ「立ち話もなんだし、親父の部屋って空いてるの？」

シルバ「空いてるが、血の匂いがするぞ？」

(うわぁー。本当に殺人一家なんだ！)

改めて実感するマロン。

バンク『！・・・何かいるでしゅよ？』

カーバンクルが言いながら飛び立つ。

「?!待ちなさい!バンク!..ごめんなさい!」

頭を下げるとその場を後にする。

イルミ「ちょっ!..マロン;..ねえ?..マロンが向かった先って..。」

シルバ「キキヨウが居るだろうな。それにしても、面白い。後で、ちゃんと顔合わせさせてくれ。イルミ。」

イルミ「うん。勿論だよ。俺もちゃんと紹介したい。」

「バンクー?..バンクー。..何処に行った?..」

悪戯っ子のバンクを捜して迷子になった二十歳のマロンさんVV

(年を言えば年を言うほど、寂しくなるな~)

キキヨウ「キヤー!..なんですの?!汚らわしい!..」

「...ああ。どうやら、元凶の元を見つけられそうだ..」

バンク「御主人しゃま!..!..」

バンクが私の元へとすっ飛んでくる。

「何があつたのかを説明できるよね?バンク;」

一つの部屋を覗くと荒れ放題となっている。

キキヨウ「その変な生き物は、貴女のですか?!」

(?・・・この人、悲しい人だ。)「・・・すみませんでした。マダム。この子が失礼をしたのであれば謝ります。いいえ。謝らせて下さい。申し訳ありませんでした。」

キキヨウ「?!・・・話しの分かる子は好きよ!・・・それは念なの?」

「はい。私の大切な仲間です。」

頭を下げたままキキヨウに事情を説明していく。

和解する闇

キキヨウ「まあ……イルとキルの……マロンさんと言ったわね？」

「……はい。」

キキヨウ「……貴女からは私と同じ闇を感じるわ。」

「……私なんて、闇に住んできたのは少ししかなかったの……」

キキヨウ「それでも、元は闇の住民。そう簡単には抜けられないはずよ？」

「……けれど、闇にはもう、染まりたくないのです。キルアにも！……染まってもらいたくない……」

キキヨウ「……分かった。キルの事は許すわ。」

「！本当ですか?!」

キキヨウ「私と似た人間に出会えたのも運命でしょうし？けれど、闇はそう簡単に抜けれないわよ？」

「……ええ。私が良く分かっています。光は眩しすぎます。」

暗い顔をしながら呟く。

「……けれど、なぜか、闇の住民は光を欲しがる。それは……」

羨ましいから？」

キキヨウ「……ごめんなさい。辛い事を思い出させたみたいね。涙を拭いて？」

言いながら高そうなハンカチを差し出してくれる。

「！……私……泣いて……？」

自分の頬を撫で困惑した面持ちで告げる。

キキヨウ「……闇を忘れたいから光を求めるのだと思うわ。私も救われた。」

「……キキヨウさんは今が幸せですか？」

キキヨウ「勿論よ！……だから、貴女にもきつと、光が差し込むわ。」

「……すみません。泣いてしまって……」

涙を拭き、頭を下げ謝る。

キキヨウ「良いのよ。キルアを出す前に、一緒に食事をしてくださる？それが私の貴女へのお願い！」

「ですが、なにぶん、手持ちの服がなくなって……このような服装では失礼だと……」

キキヨウ「貴女に合いそうな服なら幾らでもあるわ！イルミール

「三！」

イルミ「？なに？話は終わったの？」

キキヨウ「ええ。イルミ。私は食事の準備をするから、マロンさんに見合う服を探して着せてあげて？いいわね！ちゃんとエスコートをやるのよ！」

言いながらその場を離れるキキヨウ。

「元気なお母様だね？」

イルミを見つめたまま、動かないマロン。

イルミ「・・・もしかして泣いた？母さんに何かされた？」

「まさか！相談に乗ってもらっただけ。ごめんね？時間も手間も取らせて？」

イルミ「俺は別にいいけど。それよりも、服、どうしようか？」

「イルミが見立ててくれるの？クスツ　キキヨウさんみたいなひらひらじゃなきゃいいよ」

想像しながら意見を出す。

イルミ「なら、移動しよう。この部屋には母さんの趣味の物しかない。」

いいながら部屋を出て別の部屋へと行く。

「・・・いいお母様だね？」

少しほっとしたような顔で、イルミに小さく呟く。

イルミ「あれ？もしかして、馬が合っちゃった？」

驚いた表情で部屋に入りながら私を見やり言う。

「意外とね？うわぁ・・・凄い服；本当に服が好きなんだね？」

イルミ「この部屋の中の物は母さんのよりはマシだけど？」

「・・・誰の？」

イルミ「俺の婚約者とか、気に入った女性に着せた服だったかな？」

「それじゃー、殆ど着てないんだね；」

呆れたように服を見ていく。

イルミ「どう？気に入ったのとかある？」

「うーん；いっぱいありすぎて迷うよ；それに・・・私が一緒に食事をして良いの？」

今更ながら不安になり、イルミを見つめて小さく問いかける。

イルミ「随分と気に入ってたみたいだしね？それに、親父も話した
いて。」

「それなら、断れないね。」

ユニコーン『これなどはいかがですか？』

「胸が目立つよ。」

イルミ「え？」

「念能力の一つ：ユニコーンが、これがいいって。」

胸を強調した服を見せながら言う。

イルミ「。。。。。」

「胸に自信ないし、見せたくもない。けど、色は好き。」

シヴァ『私は、主にはこちらが似合つかと思いますか？』

「悪くはないけど、私に合うかな？…エレガントすぎるのも嫌。」

バンク『僕はこれがいいでしゅv v』

「?!バンク!////何を持ってるのは!////」

下着のような透けている服を持ち遊ぶバンク。

「意見が合わない。」

中にいる子達に耳を貸し困惑するマロンが告げる。

イルミ「クスッ　いつもそんな感じなの？」

念を見つめながら問うイルミ。

「うん。性格の違う子ばかりで困るの；イルミは私にこの中でどれを着て欲しい？／／／／」

一応、念能力の生き物達を選んだ物を見せながら話しを振る。

イルミ「一番、最初のやつ。」

「胸を強調しろと？！嫌／／／　無理です；」

イルミの意見を聞くも恥ずかしく後ろを向く。

イルミからのプロポーズ

イルミ「胸に自信ないって・・・意外とあるよね？」

何時の間にやら、真後ろにいるイルミに呟かれる。

「?!／／／／　そういう問題じゃなく・・・その・・・こういう服、着た事がなくなつて；」

イルミ「着てみれば？意外と似合うかもよ？」

「着ても、胸を隠せるようなショールが欲しいの！／／／／」

なぜか、話しながら、私は壁へと押しやられてしまい、逃げ場がなくなる。

「・・・それに・・・私は着飾らないままが良い。」

納得をさせようと必死に説得する。

イルミ「マロンは、もっとオシャレをしたほうがいいよ。可愛いんだし？」

「私なんか、可愛くないよ！／／／／　それに、やっぱり、着たくない；」

イルミ「無理。着ないなら脱がして着せる。」

「ああ。着せない。着ないという選択肢は消えてるんだ？」

呆れたように目の前の人物を見やり言う。

イルミ「これなんかどう？」

新たな服を私の事を無視して選んでいくイルミ。

「・・・無視なんですね？・・・寂しいです・・・」

シユンと頂垂れ、その場での字を書いて落ち込んでしまつマロン；

イルミ「・・・言つとくけど、そのまま壁と向き合つてると襲つよ
？」

「！！まさかー；イルミさんがそんな冗談を言つんですか？・・・」

驚いた表情でイルミを見つめるも。

イルミ「俺が冗談で物事を言つと思つてるの？」

「／／／／ なっ！／／／／・・・本気・・・なんですか？／／
／／」

体勢を立て直し、イルミを見つめ小さく問いかける。

イルミ「うん。妹みたいに思つてたけど、守りたいって思つたら好きになつてた。」

「間接に説明をいただきありがとうございます／／／／」

恥ずかしくなり、顔を反らし、イルミの事を真剣に考える。

イルミ「……直ぐに答えを出せなんて言わないから？考えてみて？」

「……ん。考えとく。」

イルミ「マロン。これを着なよ。」

「うん。絶対に嫌だVV」

イルミが差し出してきたのは、何故だか、バンクが選んだ下着のよ
うな服だった；

そして……とうとう、私は、一番、最初に使われたドレスを着る
事となってしまった。

「あうっ／＼／＼……イルミ・帰りたい／＼／＼」

自分の姿にしどろもどろになり、後ろに居るイルミを見やり小さく
つぶやく。

イルミ「……。」

「？イルミ？……もしかして、かなり似合わなかった？」

後ろの人物を振り返り見つめて更には首を傾げて問うマロン。

イルミ「……否。逆。似合いすぎて言葉がなかった。」

「／／／ 真顔でそんな恥ずかしい事を言わないでよ／／／」
胸を強調された服に視線を落とし、真っ赤な顔でイルミに言う。

イルミ「さあ、お嬢さん？ エスコートをするので、お手をどうぞ？」

こうしてみれば、イルミは美形の良い所の坊ちゃんにしか見えない。

「あら？ このお転婆娘を扱いきれるかしら？」

冗談っぽくイルミの手を取り、緊張を紛らわす。

イルミ「自信を持って・・・胸を張って？」

「これ以上、この胸を強調しろって言うの？」

イルミに言われたとおり、自分を落ち着かせ、睨みながら言う。

イルミ「だって、素敵なのに隠すのはもったいないよ。」

「だから！／／／ そんな恥ずかしい事を真顔で言うな／／／」

イルミの言葉に反論しながら怒鳴りつける。

イルミ「着いたよ。緊張は解れた？」

「全然。かなり緊張してる。」

イルミ「それじゃー、おまじないしてあげる。」

言うと、イルミは私の手を引き、唇に優しくキスしてきた。

「！／／／／」

真っ赤になり、イルミから離れる。

イルミ「？ほら。中に入るよ？」

「・・・なんで、キスした相手にそこまで普通かな？..」

イルミ「・・・普通じゃないよ。好きな子にキスしたのに普通に居られない。」

言いながら手を取るイルミの手は汗を握っていたので少し湿ってた。

「／／／／・・・入ろう？もう、大丈夫だから。」

イルミが本気なのを感じながら、部屋へと歩みを進める。

ガチャッ

キキヨウ「まあまあ！見違えて！その方が似合ってるわ。」

「いえいえ。私など、その辺の虫けら同然です。キキヨウ様の美しさには適いません。」

私はさっきまでの緊張などお構いなしにキキヨウに喋る。

シルバ「さあ。座りなさい。食事にしよう。」

「はい。イルミさん。お願いします。」

イルミ「うん。この席に座って。」

イルミはマロンをエスコートし、席へと座らせられる。

シルバ「先に食事をしよう。」

シルバの声と共に、毒のたっぷり盛られた食事が始まった。

ゾル家の食事会

ゾル家の食事会がこんなに静かで落ち着かないものとは思わなかった。

ゼノ「フム。それでは、少しお前さんの話を聞かせてはもらえないか？」

ある程度、食事を終えた皆さんが私を見やり問う。

「はい。勿論、よろしいですよ。」

私は、毒の盛った食事をドルチェに食べさせ、その場を逃れた；

シルバ「マロン・・・と言ったな？念は誰かに教えてもらったのか？」

「はい。ヒソカと言う人物に。」

シルバ「何個の力を持って居るんだ？」

「分かりません。10以上だと思われませんが。」

シルバ「・・・キルアとイルミの事はどう思ってるんだ？」

「？大切な仲間だと思っております。・・・今はそれ以上でもそれ以下でもありません。」

目を反らしながら答えていく。

ゼノ「……シルバや。マロンさんにキルアを任せてはどうじゃ？」

シルバ「だが、親父！」

ゼノ「マロンさん。キルアの事を頼めますか？」

「！……私などでお役に立てるのであれば、キルア君の面倒を見ます。」

ゼノ「ウム。彼女もこう言ってるんじゃない。シルバよ。キルアを自由にしたらどうだ？」

シルバ「……。」

ゼノ「世界を見つめるのも一つの修行じゃ。」

シルバ「……分かった。だが、俺は諦めない。キルアを最強の殺し屋にする。」

「私も、キルアに素晴らしき、一人の人間となってもらいたいです。」

シルバを見つめたままに静かに告げる。

キキョウ「話はすんだみたいね？ミルちゃん？キルアを自由にしないな。」

ミルキ「ブツ！……本気で言ってるの？……お母様？……」

転々と話して居ると、ミルキとキルアの姿が急に現れた。

ミルキ「???どうなってるんだ?」

キルア「マロン!・・・だよな?」

「さっき振り。キルア。・・・似合わないかな?」

自分の格好を見つめながらキルアに問いかける。

キルア「まさか!／＼／＼ 見違えた／＼／＼」

キルアは照れくさそうにマロンを見つめて言う。

「私、ゴンが来るまではキルアの面倒を見る事になったから?」

キルア「ゴンたちも・・・来るのか?」

「?・・・ゴンなら必ずやって来るよ。だから、それまで一緒に修行でもする?」

キルアに目線を合わせながら問いかける。

キルア「・・・ん。マロンと一緒に待つ。」

「クスツ そう言う事なので、お部屋を一つ、お借りしてもよろしいでしょうか?」

キルア「俺の部屋で一緒に寝ればいいのに。」

「駄目。キルアってば、私とゴンの事を聞くつもりなんでしょ?」
苦笑しながら、キルアを見つめる。

キルア「いいだろ?・それに、俺の事も監視した方がいいだろ?」
何かと理由をつけて側に居ようとするキルア。

シルバ「今日だけは一緒に寝てやってくれないか?部屋は明日、用意しよう。」

「あー・分かりました。」

キルア「やった!マロン!部屋に行こうぜ!」

「キルア・そんなに引っ張ったら服が破れちゃうよ。」

キルアに引かれながら席を立ち去るマロン。

キキョウ「随分とキルちゃんもマロンさんが気に入ってるのね?」

イルミ「けど、マロンは誰にも渡さないけど。」

シルバ「ハハツ。だが、どうやら、誰かにマナーを教わってるようだ。恋人かもしれない。」

自分の息子を面白そうに見つめて問いかける。

イルミ「うーん。・・・けど、今は恋人、居なさそうだし、様子を

見るよ。」

シルバ「・・・それは構わないが、様子を見てるうちにキルアに手を出されるぞ?」

イルミ「それは勿論、阻止するよ。」

言いながら、キルアの部屋へと足早に向うイルミ。

シルバ「クツクツク。困った物だ。」

キキョウ「本当!マロンさんさえ心変わりをすれば楽なのに!」

そんな話をしてるなど、キルアの部屋に居るマロンは知らずに、突然、扉を開けて入ってきたイルミにもかなり驚いた。

キル

キルアの事件から、結構たち、ゴンたちが来ていた。

「……もうそろそろか。」

ゴンたちの様子を思いながら小さく呟く。

キルア「……どっか、行っちゃうのか？マロン。」

「ゴンに会う訳には行かないからね？私の事は黙っててよ？」

ゾル家とすっかり打ち解けたマロンがキルアの部屋でキルアを見つめながら言う。

キルア「勿論。ゴンにはいわねーよ。けど、何処に行くんだ？」

「全然、決めてない……」

キルア「馬鹿だろ？それ？」

呆れたように私を見て呟くキルア。

そんな会話をして居ると、マロンの懐から機会音が聞こえてきた。

「……携帯が鳴るなんて、ゴン以外に教えてないんだけど、ゴンは携帯もってないし？」

恐々と鳴らない筈の携帯のディスプレイを見つめるマロン。

キルア「へえ？マロンって携帯、持ってるんだ。誰から？」

「・・・分からない。登録してない人から何故、鳴るか？」

ディスプレイには“ヒソカ”と書いてあるのは見間違いであった欲しい。

キルア「・・・出ないの？」

「うーん：何の用だろう？」

言いながら、携帯に恐る恐る出てみる。

ヒソカ「やあ　なかなか、出てくれないから興奮しちゃう所だったよvv」

「何で、私の携帯の番号を知ってるの？」

ヒソカの答えを聞きたいようで聞きたくない私は恐る恐る聞いてみる。

ヒソカ「知りたい？それはね。」

「やっぱりいい：聞きたくない：それで？何の用？ヒソカ？」

ヒソカの言葉を途中で遮り問いかけてる。

ヒソカ「少しは相手をしてくれてもいいじゃないか？・・・マロンは今、暇かい？」

「いいえ。全然。まったくもって暇じゃないよ。」

ヒソカ『それじゃー、天空闘技場に来なよ。』

「私の言葉を無視したよね？……まあ、いいけど……」

ヒソカ『待つてるつもりだけど、場所は分かるかい？』

「分からないかも；地図、送ってよ？」

ヒソカ『分かった。それじゃー、迎えにいくね？』

「駄目・そっちに行くからこつちまで来ないで……」

ヒソカ『チエ 仕方ないな。分かったよ。地図を送るからね？ちやんと来てね？』

「行かなかったら？」

ヒソカ『無理やり襲うVV』

「必ず行かせて戴きます！」

私はヒソカに怒鳴りながら電話を切った。

キルア「……頑張れよ？……」

「……応援されたくないわ……」

出かける準備をしながら言う。

キルア「俺とゴンも用があったら天空闘技場に行くから？」

「助かる・私だけじゃ逃げ出したくなるもん・それじゃー、行くね？」

キルアに手を振ると扉を開け歩き外に出る。

イルミ「あれ？マロン、帰るの？」

「あ。イルミ。うん。長居は無用だからね？イルミは仕事？」

イルミ「まあね。何処まで行くの？」

「天空闘技場まで・・・ヒソカに会いに。」

項垂れながらイルミに言う。

イルミ「・・・送ろうか？」

「本当ですか？嬉しいです。」

ニコリと微笑み言う。

イルミ「・・・飛行船。乗りなよ。」

飛行船に案内されながら言われる。

「イルミさんは、何の仕事で何処に行くんですか？」

イルミ「・・・ごめん。言えない。」

「謝らないで下さい・私が聞いた間違いでした・さあ！行きましょ
う！」

飛行船に走りながら貴方に声を書け。

イルミ「もう、マロン。走ると転ぶよ？」

「妹扱いは止めて下さい。」

飛行船に乗り込みながら文句を言う。

イルミ「妹？そんな風に思ってない。俺は、マロンの事、好きだよ。」

「?!そんな話し、急に振るの止めてください!」

真っ赤になりながら貴方に言い。

イルミ「言っておくけど、本気だよ？」

真顔で続けるイルミさん。

「良いです!」
拷問に近いですから!」

耳を塞ぎイルミに叫び言い。

イルミ「チエ。まあ、覚えておいて?」

「今すぐに忘れたい気持ちですよ。」

イルミの言葉に返事を返して居る間に飛行船は飛び始めた。

暫く、空を飛んでいると天空闘技場らしき建物が見え始める。

「あそこって、そういえばどんな所なんですか？」

イルミ「知らないで来たの？まあ、名前のとおり戦う場所だよ。ヒソカはきつと頂上に居るだろうからまあ、頑張りなよ。」

「・・・なんだか、私、とんでもない事に巻きこまれてない?。」

苦笑しながらイルミに問うも、何時の間にか飛行船から降ろされ、飛び去っていた。

ヒソカと試合

天空闘技場にて、登録をしたら、やはり戦う事になった。

ゾルディック家によって、少しは鍛えられたので、戦うのには、不便をしなかった。

そして、何時の間にやら、200階に到達した。

そしたら、やはり、ヒソカが待っていた。

ヒソカ「久しぶりだねVVマロンVV」

「久しぶり；私、戦うなんて聞いてなかったんだけど。」

ヒソカ「まあまあ、ここまで来れたなら良いじゃねーか。」

「それで、用事って何？人の携帯に勝手に登録する位なんだから、タダ事じゃないんでしょう？」

ヒソカ「いいや？会いたかっただけだよ？」

「・・・そんな理由で人の携帯に・・・」

ヒソカの性格は、分かり始めていたが、脱力したマロンだった。

ヒソカ「たまには、こう云う所も良いんじゃないかい？それに、ちよっとした小遣い稼ぎになるよ？」

「……実際の心は？」

ヒソカ「ゴンとキルアが来るって賭けてるんだ。」

「?!ゴンとキルアがここに?!何で?!」

ヒソカ「勘vv」

「……ゴンとキルア……ゴンとキルア……うん。確かに、来るかも。」

ヒソカ「マロン。……今は、バロンか。僕と戦わない？」

「絶対に嫌。」

そんな会話をしながら、マロンは、与えられた部屋に行くところののだが……。

「……なんで、着いて来るんだ?」

ヒソカ「対戦をオーケーしてくれるまでvv」

「……良いよ。バロン=ユニコーンの姿じゃないなら。」

ヒソカ「?何で?」

「バロンの姿のまま、天空闘技場で戦って、もし、ゴンが来たら怪しまれるって!」

ヒソカ「……ゴンは、そこまで頭が回らないんじゃない?」

「あの子は、変な勘が鋭いのお・バロンの・・・ましてや、試験を受けた姿のままだと、可笑しいって勘繰るに決まってる。」

ヒソカ「分かったよ。何で、向って来るんだい？」

「ヒソカが好きそうな奴。」

にこやかに伝えると、ヒソカから、殺気とは違うオーラを感じた。

「?!私の試合日時は、ヒソカが決めて良いから!..」

慌てて逃げるように部屋の中に入ると鍵をかける。

(・・・興奮・・・してた?;))

鈍いマロンでも分かるほど、ヒソカは、マロンとの試合を楽しみにしているようだ；

しばらくし、マロンとヒソカの試合が開始された。

「・・・何も、今日じゃなかったって良いんじゃないか?..」

ヒソカ「マロンは、逃げかねないからね。」

審判「?あのー?バロン選手・・・ですよね?」

「??そうですよ。」

審判「?下の報告の姿と違うような・・・。」

マロンの姿は、髪の毛が短く、三つ編みで結ってあるように纏めてあり、姿は、青を中心とした服に男。

髪の色は、銀に少し青を混ぜた感じで、身長は、166cmに伸びていた。

「気にしないで下さい。これも俺なんで。」

ニコニコと、審判に早く始めるように促し言うバロン。

審判「…それでは、試合開始!」

審判のその声を聞くと、ステージ上に、ヒソカとバロンの姿が消えた。

審判「?!どうなってるんだ?!まったく見えません!」

二人とも、凄い速さで、攻防を繰り返している、審判は、ポイントも付けられずに居る。

数分後、砂煙の中、二人は立っていた。

「はあっ…はあっ…」

ヒソカ「っ…」

二人とも、少しだけ掠り傷を負って居るも、内面的に、限界が近づいているのは見て取れる。

「・・・そろそろ、終わりにする？」

ヒソカ「・・・そうだね！」

言っていると二人は、組み手を始めた。

審判「おっと?! 組み手を取った! どちらかが引けば、終わりな感じですよ！」

微妙な、審判の中、二人は、組み手を取ったまま。

ヒソカ「バロン。“ ”。」

「・・・はあっ?!」

ヒソカが、何かを呟いて、バロンは驚き、隙が出来た。

その瞬間、ヒソカに吹き飛ばされた。

審判「・・・えっと・・・KO! ヒソカ選手の勝ち！」

観衆からは、拍手が巻き起こった。

マチ

ヒソカとの試合の後、マロンは、気絶をしまい、女に戻り、ヒソカに抱き上げられ、ベッドに連れて行かれた。

「……んっ……は？」

ゆっくりと目を覚まし、辺りを見回そうとするも、何かに視界を阻まれて見えない。

「……？何？これ？」

ペタペタと、壁のような……だが、動いてる物に少し手を這わす。

ヒソカ「クツクツクVV随分、積極的だねVV」

マロンの頭上から、あの、奇術師ヒソカの声が聞こえてきた。

「……ええ?!何で、私、ヒソカの腕に抱かれて寝てるの?!」

焦って、その腕の中から逃れようと身を振る。

ヒソカ「動かない方が良いよ?怪我をしてるんだから。」

「……そういえば、私と、ヒソカ……戦ったんだっ……って納得してたまるもんですか!」

ヒソカの胸の中で、再び身動きを始めるマロン。

ヒソカ「クツクツクVV逃がさないよ。これでも手加減したけど、
気絶するとは思ってなかったからさ？心配・・・したんだよ？」

ヒソカは、マロンを抱きとめると聞こえるように呟く。

「・・・って、ヒソカが気絶させたんだから、責任を取るのは、
当たり前だよな。」

納得いかない顔で、ヒソカの腕の中に納まり続けるマロン。

ヒソカ「それにしても、強くなったね。マロン。驚いた。」

「ヒソカになんて言われても嬉しくない。だから、ヒソカ。腰に回
した手を離して。」

睨み付けながら、ヒソカに言い放つマロン。

ヒソカ「うーんVVもう少しだけ。」

「いや・・・なんで?」

再び、体を擦ると、姿を水色のものとなった。

シヴァ「主の言い方が温いのです。離れなさい。汚らわしい！」

シヴァがそこまで言うと、水の波動のようなものがヒソカにぶつ
かった。

ヒソカ「?!・・・びしょ濡れ。」

シヴァ「貴方がしつこいのがイケナイのですよ？」

ヒソカ「君は……？」

シヴァ「シヴァです。水を司っております。そして、主の身を守っております。」

軽くお辞儀をしながら、シヴァは、警戒の糸を解かない。

ヒソカ「……マロンは？」

シヴァ「起きてますよ？意識も同じなので、繋がってます。主が嫌だと言うのであれば、我が身に変えて、守るだけです。」

ヒソカ「けれど、その体はマロンのだよ？」

シヴァ「そうですね。主の体を傷つけないすべは身につけておりますので。」

ヒソカ「……ふうっ。分かったよ。マロンには、手を出さない。」

シヴァ「……この部屋から、出て行きます。ここは、ヒソカ殿の部屋ですよね？」

ヒソカ「そこまで、警戒しなくたって良いじゃないか？」

シヴァ「主は、貴方を信用していますが、私は、しておりませんので。失礼します。」

そこまで言うと、シヴァは、ヒソカに背を向けて、部屋から出て行

った。

ヒソカ「かつこいいなーVV」

「ごめんね；シヴァ；」

シヴァ『良いですよ。ヒソカさんが悪いんですから。』

「本当にごめんね；」

そう、話していると、エレベーターが誰かを乗せてやってきた。

?「……。」

(ふわー。可愛い人ー。)

?「ねえ。あんた。」

「?……私の事ですか?」

周りを、一回、見渡し、可愛い女の人を見やり問いかける。

マチ「ああ。あんた、この辺で、ヒソカって言う人物知らない?」

女の方は、マロンを見つめたまま問いかける。

(ゾクッ!この人……念能力者だ；)「ヒソカ?知ってますよ。

この階では最強だっって言われてますからね；彼に何が御用で?」

丁寧に、ヒソカの事は、他人ですよーと思いつつ問い返す。

マチ「案内してくれない？あいつの部屋に。」

(いやいや・無理でしょ・)「ヒソカは、もうそろそろ試合ですの
で、そちらに行けば会えますよ。入場券は、まだ売り切れてないと
思うので、行ってみたらどうですか？」

丁寧に敬語のまま、警戒を解かずに告げるマロン。

マチ「そうかい。色々ありがとうね。」

そついい立ち去る女の人。

イフリート『おい。マロン。お前、肩に何かついてるぞ?』

(あの女の人だ・エレベーターに乗ってから焼いて・)

イフリート『了解。』

そう会話をしながら、エレベーターに乗り、マチがマロンに付けた
念糸を燃やした。

(一体、何者だろう?あの人・・・。)

マチ(あの女。私の念糸を切った。只者じゃないね。)

そんな二人の心情がありながら、マロンはある事を思い出した。

ミトお母さんの怒り

(うつげっ・ミトさんに連絡してない・怒ってるだろうなー・)

試験が終わったたら、連絡するといっていたのに、連絡をしないで寄り道三昧。

あのミトさんが、怒らないわけがない。

「連絡入れて、くじら島に帰るかな!」

ミトさんの寂しがつてる顔を想像しながら、マロンは電話をしにくく。

そして、電話を見つけると即座にミトさんに連絡を入れてみた。

ミト『もしもし?どちら様ですか?』

「ミトさん?マロンだよ。」

ミト『?!マロン?!あんた、今まで何処に居て、何をしてたのよ!死んだかと思っただじゃない!』

電話を掛けてみると、案の定、ミトさんの怒鳴り声が響き渡った。

「じっ……ごめんなさい;試験終わって、ばたばたしてたから;」

ミト『そこにゴンも居るの?!!』

「ゴンは居ないの！…ゴンとは一緒に行動してないから…」

ミト『あんだ…本当にゴン離れする気なの？』

「うん！それは、良いんだけど、私、明後日、帰るから。」

ミト『…はあ？！何よ？突然？…』

「ホームシック？」

ミト『何で、疑問系？…何時頃、帰ってくるの？』

「たぶん、遅くなるから、待つてなくて良いよ？」

ミト『待たないわよ！…何が食べたいの？』

「ミトさんのミートスパゲッティがいいな。」

駄洒落じゃありません…この二人は、いつもこのような会話なので
す…

ミト『また、めんどくさいものを…気を付けて帰ってきなさいよ？』

「はい。明後日ね。ミトさん。」

そう告げ、電話を切る。

()ミトさんにお土産買って、帰ろう。何が良いかなー。()

フラフラと買い物に出歩くマロン。

(あの店、可愛いー。)

そう言つて、覗いた店は、オルゴール店だった。

(オルゴールか。・・・?あれ?念を纏つてるオルゴールがある。)

オルゴールを眺めると、一つのオルゴールから念を感じ取れた。

店主「いらつしゃい。そのオルゴールは、競売物なんだ。」

「競売?」

店主「ああ。値札に値段を書いて買うものだ。今日の夜まで受付だから、今のうちにそれ以上の値段を書けば、貴方の物ですが・・・。」

「?ですが?」

店主「そのオルゴール、音が鳴らないんですよ・なんでかは分からないんですが・」

「そうですか・・・。」(念能力者の念かな?バンク。)

バンク『はいでしゅ?』

(直せる?)

バンク『任せるでしゅ!』

バンクは、楽しそうにオルゴールを触る。

暫くすると、オルゴールからは、綺麗な音が流れ出た。

店主「?!音が!・・・なんと、綺麗な音なんだ。」

「この紙に値段を書けば良いんですよね?」

店主「あ・・・ああ;」

「では、夜、取りに來ますので、取っといってくださいね。」

マロンはそこまで言うと、身を翻し、天空闘技場に戻った。

すると、そこには、居るはずのない人物が居た。

(?!ゴン?!キルア?!何で、こんな所に?!;)

マロンは、只今、二人に気付かれないように部屋に隠れたままです。

(まさか・・・ヒソカは、二人が来る事を知ってて私をここに?)

モンモンと考えながらも、出て行けない姉心で更に落ち込む。

(・・・どっちにしろ、今日中にここを出るから、会わないで済むかもだけど・・・もしかして、あの二人、念を覚えたのかな?)

気配を探りながら、二人の事を遠くから見守る。

(私は・・・あの二人の側に居られない。)

暗くなるのを部屋の中で待ったまま、オルゴール店にやって来たマロン。

店主「いらっしやい。オルゴール。あなたの買値で良いよ。」

「ありがとうございます。それでは戴いて行きますね。」

オルゴールを包み、飛行船に乗り、マロンはくじら島へと帰っていった。

ゴンと再会

ゴンが天空闘技場で、ヒソカと戦ってる間にマロンはくじら島に降り立った。

「懐かしの我島ー！」

マロンの島ではないものの、マロンは機嫌良く帰ってきた。

「エへへ。ミトさん、怒ってるかなー？」

懐かしの島と、懐かしの人たちに合える喜びがマロンを襲う。

(こんな事・・・あの頃には考えられなかったのに・・・)

自分の過去を少しだけ思い出し、暗い顔をしながら歩き続ける。

(あの過去を思い出したって変わらない。変わらないといけないのは、今の自分だ。)

自分の過去を吹っ切りながら、ミトさんの居る家へとやって来た。

「只今ー。」

ミト「マーローンー！」

「あ。ミトさん。只今。」

ミト「只今じゃないわよ！試験はどうだったの？！怪我はしてない

の?！」

「ミトさん：そんなに揺らすと具合が・・・」

ミトさんに肩を捕まれて揺さぶられながら告げる。

ミト「はあっ：ミートスパゲッティ、作ってあるから、先にシャワーを浴びて一息入れなさい。」

「ふぁーい・・・」

こうして、くじら島には、日常が戻ってきた。

「ミトさん。お土産、持って来たよ?」

寝間着に着替えて髪を拭きながら、紙袋を持ち告げる。

ミト「お土産?怪しい物じゃないわよね?」

「怪しいものは買わないよ：オルゴール。凄く可愛いよ。」

ミト「そう。それじゃ、貰ってあげるわ。」

(素直じゃないな・・・)

そんな、一時が流れていると、いきなり家の扉が開いた音が家中に響き渡った。

ゴン「ただいま!ミトさん!マロン!」

「ゴン?! ゴン……!」

突然、愛しの義弟、ゴンが帰ってきてマロンが喜び、抱きつく。

ゴン「ちょっと・マロン・倒れる・」

勢い良く飛び付くと、ゴンはふら付きながらもマロンを支える。

「何時、戻ってきたの?なんで、連絡くれなかったの?お姉ちゃん、寂しかった!」

ゴン「落ち着いてよ! ; マロン・紹介したい人物がいるんだ!」

「?!彼女?!」

マロンは、ゴンの言葉に、ゴンから離れ告げる。

ゴン「違うから・入ってきて・キルア・」

キルア「どうも。始めまして。」

キルアは、表情を変えず、マロンに挨拶を交わす。

「……あら。可愛い男の子。え?! ゴンって、そっちな?!」

ゴン「そっちって何?!」

訳の分からない兄弟喧嘩を繰り広げるマロンとゴン。

クジラ島にぎやかな時が戻って来たのでした。

「っていつか、ゴン。臭いよ。お風呂に入って来なさい！」

ゴン「ええ？でも、今から！」

「でもじゃない！中に入ったって、ミトさんに同じ事、言われると思うよ？！」

ゴン「うっ…けど！」

「はい！10！9！8！」

怒った顔でカウントダウンを始め。

ゴン「行くう！…キルア！」

キルア「え？お…おい？」

キルアは戸惑いながら、ゴンにお風呂場に連れて行かれた。

お風呂の中のゴンとキルアはというと…。

ゴン「マロンは、ミトさんの次に怖いんだ…それに、容赦ない！」

苦笑しながら頭を洗うゴンが告げる。

キルア「へえ。面白い人なんだな。マロンって。」

ゴン「え？」

キルア「?なんだよ?」

ゴン「・・・なんでもない。」

髪の毛を洗う手を再開し、風呂から上がる二人。

ミト「ゴン!本当に帰ってきてたのね!マロンから聞いたけど、驚いたわ!」

「それって、私の言った事、信じてなかったって事?!」

ミトさんの言葉にマロンは反論してみる。

ミト「だって、マロン、ゴンの幻覚を見る事が何回か合ったじゃない!」

「何歳の時の話をしているの?!」

そんな明るい会話をしながら、ゴンとキルアに食事を出した。

二人は、凄い勢いでご飯を食べ進め、美味しいと言い合っていた。

幸せとはこういふことを言うのだと、実感するミトさんとマロンであった。

キルアは上手い具合にマロンを知らない振りし続け話を進める。

G・Iへの道のり

ゴンとキルアは、食事を取り終え、森の様子を見に行くという話を聞いた。

「私も一緒に行きたい！」

ゴンとキルアの言葉に久しく行っていない事を思い出したマロンは提案する。

ゴン「もちろん、良いけど、すぐに帰ってくるつもりだよ？」

「嘘だー。ゴンはそう言っつて、1時間とか、2時間は帰って来ないよ?」

ゴン「うっ……そんな事、ないよ。さあ、行こう！」

視線を反らし、先を歩きだすゴン。

「クスクスツ 自覚ないんだ。キルアは、どんな家に住んでるの？」

知らない振りを続け、キルアに問いかけてみるマロン。

キルア「殺人一家？」

「疑問形?! 家庭事情、いろいろ?! ごめんよー。言いたくなかった?」

キルア「別に。ゴンにも似たような反応されたし?」

「さっすが、姉弟VV」

キルア「けど、なんで、マロンは森に行きたかったわけ？ずっと、あの家に居たならいつだって行けただろ？」

・・・キルアの嫌がらせなのか、解つてて理由を聞き出そうとする。

「・・・私は、ミトさんを置いて、何時間も家を出たりはしないよ。大抵、一緒に出歩くか、家の前だもん。」

何とか、言葉を繋ぎ話を続けるマロン。

ゴン「二人ともー。早く行こうよー！」

元気に何も知らずに先を歩く、義弟が羨ましい。

「うん！・・・ねえ。キルア。意地悪になってきてない？」

ゴンに返事をし、キルアに問いかける声を落として問いかけてみる。

キルア「俺は、意地悪だけど？」

にやりと勝ち誇った顔をして、ゴンの元へと走っていくキルア。

「・・・なんか、年下に弄ばれてる感が；」

まあ、それは、さておき、森へやってきた三人は、驚きの光景を目の当たりにした。

なんと、人間には、絶対に懐かないとされていた、動物たちが、ゴン達の帰省を知ったのか、川魚を置いて行っていたのだ。

「……お帰りだった。」

ゴン「……うん！」

キルア「それにしても凄い量だな。俺たちがここに来る事、解ってたみたいだ。」

小腹も空いてた事で、その場で魚を相手食べた3人。

「……ところで、試験はどうだったの？」

一応、知らないという事になってるので、聞いてみるが後悔する事となるマロン；

ゴン「あ！そう言えば、マロンに似た男の人、見つけたよ！」

「……へ……へえ。どんな人？」

平静を装いつつ、ゴンの話を聞こうとする。

ゴン「？一言で言うとそのまんま？」

「そんなわけないじゃん！；私は、ずっと、ミトさんと一緒に居たよ？！」

驚きながら、ゴンに首を振り告げる。

ゴン「姿形は、似てないんだけど、なんか・・・行動パターンのな
?」

「・・・へえ； けど、この島から、一歩も出てない私には関係な
いか。」

そう、切り返し無理やり話しを終わりにさせるマロン。

少し、その場で話を続け、そしてから、家に帰った3人。

そこにミトさんが待っていた。

ミト「マロン。少し外してくれる?」

「・・・うん。どうせ、もう寝ようとしてたし！お休み。ゴン。キ
ルア。」

マロンは明るく振る舞い自分の部屋に向かう。

「・・・ジンさん。きっと、ゴンは、貴方を追って、居なくなる。
・・・だから、私も。」

空を見つめ、この場には居ないジンに小さく呟き、ベッドに沈むマ
ロン。

ゴンとキルアが、ジンの情報を手に入れた事も知らず。

次の日、ゴンとキルアは、何かを決心したような顔をしていた。

「・・・ゴン。キルア。行くんだね？ジンさんの元に。」

ゴンとキルアを見つめ、小さく、不安そうに問いかける。

ゴン「うん！決めたから。ジンにあつて、一発、殴つてやるんだ！」

「クスッ ジンは、そう簡単には、捕まらないよ。空気みたいな人だから。ね？ミトさん？」

ミト「そうね。行くにしろ、お金とかは大丈夫なの？」

二人の心配性な女が引き留めようとしても、ゴンの意思が曲がらない事は知っていた。

だから、誰も、ゴンを止める事は出来ない事も、解っていた。

未来がどうあれ、ゴンは、ジンを追つて、歩みを進めるのである。

仕事

ゴンとキルアが旅立ったその日、マロンは、ミトさんに切り出した。

「……ミトさん。私も、また、クジラ島を出ないといけないの。」

ミト「……今度は、帰ってくるの?」

なんとなく、ミトさんの中には、マロンが帰って来ない事を確信していたようだった。

「……ごめんね。分からない。けど、ミトさんのミートスパゲッティ、食べたさに帰って来ちゃうかも。」

困ったように、目の前の人物に告げる。

ミト「馬鹿ね!そんな事、言ってないで、ここに居なさいよ!」

「……それだけは出来ない。私は、ここを最初から出るつもりで居たから。」

ミト「……分かったわ。けど、落ち着いたら電話を頂戴?」

「うん。それじゃ、行ってきます。今まで、ありがとうございました。」

ミト「……早く行きなさいよ!」

ミトさんの声が震えてるのに気がついたが、マロンは家を後に旅立

った。

その場で、泣き崩れたミトさんを受け止める人物は、そこには存在しなかった。

（まずは、仕事を探すか。お金はあるけど、住む場所とかも決めないと。後、私が何者なのかも知りたい。）

そう考えながら、大きな街へ向かう事となったマロン。

（ヨークシンシティか。ここを拠点にして動くか。）

そう思い、パソコンと携帯を買い、マンションも借りたマロン。

（ハンターライセンスを使って仕事を探せば早いけど、危険が隣り合わせ。だけど、その危険の中に私の秘密も少なからず入ってるはずだ。）

借りたマンションの中で、ヨークシンシティ内の仕事情報を見つめるマロン。

（ノストロードファミリーの護衛？・・・これ、まだ、参加者募集中だ。）

なんとなく、気になった募集記事欄。

（ハンター優遇。ライセンスの階級、有無なし。お金は、高所次第で幾らでも。）

条件を見つめ、集合場所や参加者などの情報も探ると。

(クラピカ？クラピカって、ゴンの友達の子？どうして、そんな子が、この仕事に？)

なんとなく、引っ掛かっている仕事の参加者名簿には、クラピカという名前が刻まれていた。

(……これに、私も参加しよう。)

そう思い、名前をシヴァで打ち込み、参加希望と到着日時などを記載してメールした。

すぐにメールは返信されて、マロンは行動を移した。

メールの内容を見なくっても分かったからだ。

直ぐに来て仕事に参加して欲しいと、決まった言葉が用意されてるに違いない。

(何か隠されてる。ノストラードファミリーには。)

髪の色を水色にしながら、目的の場所へ向かいつつ思うマロン。

(それにしても、どうしてクラピカ君が、この仕事に参加してるのか、不思議。)

シヴァ 『 主；お心をお沈め下さい。』

シヴァがマロンの頭の中で、静かにマロンを宥めようとする。

そう言えば、近頃、出てなかったなあと思うも、念を覚えたゴンとキルアにシヴァ達を出すのは、危険だと判断したからだが；

（私は、至って、冷静だよ？だけど、なんだか、危ない事に足を突っ込んでる気がするんだもん；）

シヴァ『それは、主も同じでしょう？』

（私は、良いの。慣れてるから。）

シヴァ『そうやって投げやりにならないで下さい；まだ、他の道はあるはずですよ。』

（投げやりにもなってる。シヴァ。歩かないと。何も変わらないんだよ。）

シヴァ『・・・私たちは、主に従うのみですが、傷ついた時は支えられます。』

（ありがとう。シヴァ。側に居てくれて。・・・着いたよ。）

大きな家を見つめ、ノストラード家に到着したマロン。

インターフォンを押して、中に通されたシヴァ。

仲を見回すと、厳つい男や女、そして、クラピカがそこに居た。

「始めましてで良いかしら？短い間でしょうが、仲良くして頂戴。」

上から目線で、目の前に居る人たちに告げるマロン。

ダルツオルネ「なんだと！女！生意気だぞ！お前みたいなひ弱そうな奴に何ができるって言うんだ？！」

「。。。。。」

ヒュッ！

ダルツオルネ「かはっ？！」

ダルツオルネの言葉を聞き、マロンは、一瞬で姿を消し、彼の首を捉えていた。

「あまり、調子に乗らない事ね。ここに居る人たちは、人並み外れていると思ってる。勿論、私もね？分かったら、その臭い息、なんとかしな。」

警告なのか、注意なのか分からないことを告げ、ダルツオルネを開放するマロン。

こうして、ノストラードファミリーの仕事は険悪の中、始まった。

ネオン・ノストラード

あれから、ライト「ノストラードと仕事の話をした。

そして、思ったのが、このノストラードファミリーが立っているのは、ネオン「ノストラードという娘さんが鍵らしい。

そこで、マロンはネオン「ノストラードに接触を試みる事にした。

ライト「うちの娘と行動を共にする？」

「いえ。行動は一緒には取りません。ですが、監視を強めます。」

ライト「監視役は既に置いてある。」

「それでも、このノストラードファミリーが立っているのは、ネオンさんが活動してるからですよね？彼女を見張る方が良いですよ。」

ライト「・・・そうか。君がそう言うのなら、ネオンを見張ってくれ。」

「畏まりました。」

こうして、マロンこと、シヴァは、只今、ネオンちゃんを見張っているのですが。

「あの子、変装して逃げる気じゃ？・・・」

店内に入ったネオンちゃんを追うと、なんと、髪と服を買ってるの

だった。

「こりゃ、逃げるな・私も、変装するか。」

言うと、髪の毛が、真っ黒のロングになり、身長166cmほどの男になった。

「あんまり、この姿になりたくないけど仕方がない。」

店内から居なくなったネオンを追って、同じく店内を出るマロン。

だが、周りは、マロンを見つめる女の熱い視線が送られていた。

そう。マロンが変装した姿は、傍から見れば芸能人やモデルのようにかっこいいのであった。

(早く行こう…)

変装してネオンちゃんを追い、なるべく目立たないように歩きだすマロン。

しばらくすると、ネオンちゃんは止まった。

「ねえ。彼女。どこかに行こうとしてるの?」

ネオン「キヤツ! ; ; . . . びっくりしたー。えっと、貴方は?」

「ああ。ごめんね；急に声をかけたりして；俺の名前は、リヴァイア。君みたいな可愛い子を誘おうと思ってここで待ってたんだ。」

ネオン「誘う？誘うって何に？あ！私は、ネオン＝ノストラード！
パパの会社の人じゃないよね？」

（思いつきりパパの会社の人だよ；）「ノストラード社は知ってる
けど、俺は関係ないよ。誘うって言ったら、ディナーや楽しいイベ
ントだろ？」

ニッコリと、ネオンに微笑み告げる。

ネオン「貴方、本当にかっこいいわね！ねえ？オークションには入
れるの？リヴァイアさんは？」

「ああ。ヨークシンシティで行われる大きなオークションの事だね
？残念ながら、僕はあれには参加しないんだ。」

ネオン「えー・残念；」

しばらくネオンちゃんと話をしていたが、その時、男の人が近づい
てきた。

クロロ「やあ。君たち、お似合いのカップルだね？」

童顔な顔立ちで、真っ黒な服装の男の人。

（・・・この人、なんだか、嫌な感じ。）

ネオン「嫌だあ！カップルじゃありませんよ！今さっき知りあつた
リヴァイアさんです！」

「どうも。こんにちわ。貴方は？」

クロロ「立って話すのもなんだし、車に乗らない？」

後ろの方に止まってる車を指しながら、目の前の男は言う。

(それって、逃げ場は作らないって言ってる気がする。)

ネオン「ええ？どうしようかなー？リヴァイアさんはどうするの？」

「僕は、用事があるから帰るよ。ネオンちゃんと話せてよかった。」

ニッコリとネオンちゃんに微笑み告げ、男とネオンちゃんに別れを告げた。

バンク『・・・ご主人さま。』

「うん。行くよ。」

そう言うと、マロンの姿は少年と化し、その場から姿を消した。

クロロ「君は、パパの仕事を手伝ってるんだろ？」

ネオン「うん。手伝ってるって言っても、パパの運命とかそういうの占ってるだけだよ？」

(・・・ネオンちゃん、何も警戒しないで男の人に仕事内容、話してる；危険だな；)

マロンは、少年の姿となり、男とネオンの乗った車の上に乗っていた。

だが、ばれない理由がある。それは、少年の姿が見えていないからだった。

（それにしても、この男、何者だ？）

車の中の会話を聞き逃さないように集中しながら思う事。

クロロ「占いて、俺の事も占ってくれるの？どんな事を占うの？」

ネオン「一ヶ月のうちに四週間ごとに分けて言葉を書くの。それが、運命。」

クロロ「その占いは変える事は可能？」

ネオン「可能だよ？だけど、難しいかな？」

こうして、男はネオンちゃんから詳しく占いについて聞いていた。

オークシヨン

クロロ「俺の名前はクロロ＝ルシルフル。29歳。俺で占ってみてよ。」

(！この人、ネオンちゃんの念が目的だ。)

突然の、男の言葉に耳を疑いながらも中を観察し続けるマロン。

ネオン「良いですよー。」

(・・・だから、少し警戒してください。)

ネオンちゃんの言葉に苦笑しながら、静かになった車内に戸惑う。

(・・・ネオンちゃんが念で占い始めたな；・・・！これ・・・念？)

いきなり、車内に立ち込めた空気に外に居たマロンでも驚いた。

(やばいな・・・どんな人物か知りたくって追って来ただけなのに。)

後悔、後に立たずとは良く言ったものである。

しばらくすると、ネオンを乗せた車は止まった。

ネオン「今日は、ありがとうございました。」

クロロ「こちらこそ。ごめんね？連れ回して？」

ネオン「いいえ！それでは、ありがとございました！」

ネオンちゃんは、クロロと名乗った男と別れた。

クロロ「・・・ところで、お前は、そんな所で何をしてるんだ？」

(?!気付いていた?!そんなわけない!； バンクのこの姿は、念能力者だろうが見つけれられない。)

シャル「流石、団長だね。俺が隠れてるの気付くなんて。」

向こうの茂みの方から、男の人が現れた。

どうやら、クロロと呼ばれた男の仲間らしい。

クロロ「仕事は終わった。次の仕事に移る。その前に、シャル達の占いをする。」

(あの男の人は、シャルっていう名前。覚えておかないと；)

何個もの念を使っていたせいか、マロンの体力は限界だった。

この所為で、マロンは大変な事に巻き込まれる事は、この時はまだ解っていないかった。

競売場

車の中での出来事を知りながら、マロン派幻影旅団達を逃がした。

そして、マロンは、シヴァへと姿を変化させながら、電話を始めた。

「もしもし？ヴェーゼ？そちらの状況はどう？」

ヴェーゼ『シヴァ。競売は、もうじき始まるわ。』

「順調そう？」

ヴェーゼ『今の所。』

バンッ！

ヴェーゼ『?!何!あいつら!』

「?どうしたの?ヴェーゼ?ヴェーゼ!」

電話口の向こう側が騒がしくなった事に、マロン事、シヴァは、胸騒ぎを覚えた瞬間。

トドドドドドッ!

「?!」

電話口向こうから、激しい銃声の音が響いたと同時に、シヴァは動き出していた。

(皆；生きていて！；)

願うも、競売上に着いた瞬間、その願いは打ち砕かれた。

周りを見渡す限り、生きてる人物や動いて何かをしている人物は見当たらなかった。

「ヴェーゼ！スクワラ！シャッチモーノ！トチーノ！イワレンコフ
！」

競売担当者たちの名前を上げるも、返答もない。

「.....」

円を張り、念能力者を探すと、円にかかったのが屋上。

それを感じ取ったシヴァは、屋上に向かった。

シズク「簡単に仕事、片付いて良かったね。」

フランクリン「簡単すぎて、肩慣らしにもならなかったな。」

ノブナガ「まったくください。もっと、強い奴は居ないのかよ？なあ？
ウボォー。」

ウボォー「本当だな。」

気球に乗り込む幻影旅団達は、気を抜いていた。

バンツ！

「……。」

ノブナガ「なつ！； まだ、生き残りが居たぞ！」

フェイタン「そんなはずはないね。念で、確認済みね。」

シズク「とにかく、今は気球を上げないと。フランクリン。」

フランクリン「ああ！俺の両手はダブルマシンガン機関銃！！！」

トトトトトッ！

「……。」

マシンガンの球は、シヴァに一つも届く事はなかった。

ノブナガ「なんだ？； ありゃ？」

シズク「水でしょ？」

ウボオー「そんなの、見れば、解る！」

フェイタン「飛び立つね。あの女は、放っておくね。命拾いすればいいね。」

気球は、どんどん飛び立ってしまつ。

「……。」

シヴァは、気球を見つめ、そして、後を構わずに追う。

シズク「?!あの女、追ってくるよ?」

フランクリン「しつこい奴だ!俺の両手はダブルマシンガン機関銃!」

再び、フランクリンは、マシンガンを撃つものの、やはり、シヴァには届かなかった。

ウボオー「くそ!; 地上に降りて、奴を殺そう!」

シャル「もう。折角、飛び立ったのに、時間を取られるよ。」

シャルは、気球を操作しながら、そう、冗談めいた所に地上から、他のマフィアたちが、気球を銃撃し始めた。

ウボオーの最後

地上のマフィアたちは、雇い主の命により、一人でも多くの幻影旅団を殺そうと必死だった。

「！止める！殺されるぞ！..」

シヴァは、マフィアたちに声をかけるも、その声は誰にも届かず、聞いてもらえなかった。

そうこうしてる間に、幻影旅団の気球は、崖の上に降り立った。

ウボオー「その、水女！」

「?!..」

ウボオー「お前は、後回しにしてやるよ！」

そう言うと、大男は、銃を打ってるマフィアたちを次々と手に掛けていった。

「っ!..」

シヴァは、躊躇のないその攻撃に、怒りや悲しみを覚えるも顔には出さず男を見据える。

そして、暫くすると、マフィアたちは、全員、息絶えた。

ウボオー「これで、お前と戦えるな。来いよ。」

「……。」

ゆっくりと無表情で大男に近づく。

ウボオー「うらぁ！」

ウボオーギンが、勢いよく、シヴァに近づいたが、攻撃は上手くいかなかった。

ウボオー「?!」

ウボオーと呼ばれた男は、水の中に捕らわれてしまったのであった。

ノブナガ「?!ウボオー!」

「動くな。お前達が一步でも動けば、こいつは助からない。」

動こうとする、幻影旅団メンバーを制し、声を出すシヴァ。

フランクリン「何が目的なんだ!」

幻影旅団メンバーは、仲間が捕えられた事に、少なからず動揺していた。

「別に。これ以上の殺しを止めて欲しかっただけよ。」

フェイタン「その割に、マフィアたちを助けなかつたね。」

「助ける義理はないからね。」

シャル「その人物を解放してくれない？」

「私を追わないって約束が出来るならね。」

ノブナガ「約束する。だから、そいつを返してくれ。」

「……良いわ。けど、私が離れてから、この念を解除させてもらう。それまで、そこに居てもらおうわ。あまり、この街で騒ぎを起さない事ね。」

そう言うと、シヴァは、身を翻して離れて、見えなくなった頃、水の牢獄は、無くなった。

ウボオー「ゴホッ！ゴホッ！；」

ノブナガ「大丈夫か？！　ウボオー！；」

ウボオー「あの女……殺してやる！」

シャル「止めておきなよ。あの人、只者じゃない。」

シズク「……悔しいね。」

ウボオー「っ！；　俺は、諦めないからな！」

ダッ！

ノブナガ「ウボオー！」

こうして、ウボオーギンは、仲間と離れ離れとなり、命を落とす事になってしまったのであった。

捕えられた者

ウボオーギンが殺された事を知った仲間達は、街で、情報を入手しようとしていた。

そんな中、ゴンとキルアは、お金欲しさに、ある仕事を行っている。

キルア「ゴンは、あっちを頼む。」

ゴン「解った。」

二人が追ってるのは、幻影旅団と思われる人物。

懸賞金の良さに、二人とも、捕える気になったのであった。

だが、幻影旅団であろう人物が、そう簡単に捕まるはずがなく、逆に捕まる事になった。

マチ「あんた達は、何が目的なんだい？」

キルア「言ったら、逃がしてくれる？」

ノブナガ「馬鹿な事を言うな。逃がしてたまるか。」

ゴン「俺達、懸賞金目的で追ってただけなんだ。逃がしてよ。」

ノブナガ「無理だっつってんだろ！どう思う？マチ？」

マチ「嘘をついてるようには見えないね。けど、逃がして、私達の

事を話されても困るわね。」

キルア「絶対に言わないって約束するから、逃がしてよ。それに、もう、追わないし。」

ノブナガ「だから、信じられるか！・・・兎に角、団長に聞かないとな。」

マチ「そうだね。あんた達を、連れて行く事にしたよ。」

ゴン「どうせ、俺達が何を言っても、連れて行く気なんでしょう？俺達、捕まってる暇なんてないのに！」

ノブナガ「俺達を追って来たのが、運のつきだったな。」

こうして、ゴンが捕まって、幻影旅団の本拠地へと連れて行かれた。

レオリオ「やばすぎだろう； だから、止めておけって言ったのに；」

レオリオは、遠目から、ゴン達が捕まった事を確認したものの、どうする事も出来ずに居た。

レオリオ「くそーっ！； どうすれば、あの二人を助ける事が出来るんだ？！」

レオリオが、一人になってしまい、四苦八苦していた時だった。

プルルルッ

プルルルッ

レオリオ「?!クラピカか?!」

レオリオは、突然、かかってきた電話を、名前確認せずに出た。

バロン「否。バロンだよ。レオリオ君。」

レオリオ「バロンって・・・ハンター試験で一緒だった! ; なん
で、俺の番号を? ;」

バロン「クラピカ君から聞いてね。彼と何回か、話して仲良くなっ
たんだ。彼は、今、幻影旅団を追ってて電話になかなか出れないか
ら、僕が電話をしたんだ。」

レオリオ「それは、ありがたい! ; 俺、一人じゃ解決できない問
題が発生したんで困ってたんだ ;」

電話の主が、以前、会った事があって、ゴン達の事も知ってるバロ
ンだと知ったレオリオ君は、藁にもすがる思いで、叫んだ。

バロン「・・・? どうやら、何か、尋常じゃない事があったみたい
だね。」

レオリオの慌てぶりに、バロンは冷静に聞いてみる。

レオリオ「それが、ゴンとキルアが幻影旅団に捕まっちゃったんだ
!」

バロン「なんだって?!」

流石のバロンも、これを聞いて、驚いてしまった。

レオリオ「どうすれば、二人を助けられるか、俺には、見当もつかないんだ；頼む；バロン；助けてくれないか？」

バロン「・・・助ける方法はなくもない。」

レオリオ「！！本当か！；」

レオリオは、電話に向かって大声で続ける。

バロン「レオリオ君。声を抑えてくれないか？これでも、我々は、幻影旅団について話してるんだ。聞かれでもしたら、面倒だろ？」

バロンは、呆れたように、レオリオに話す。

レオリオ「抑えろって言ったって、ゴンとキルアが危ないんだぞ！；

」

バロン「君がそこで、慌てて居たって、現状は良くはならないだろう。」

バロンは冷静にレオリオを宥めながら、作戦を練っていった。

作戦会議

「兎に角、そっちに向かう。レオリオ君は動かずに、そのままそこに居てくれ。」

レオリオ『けど、お前が来る前に、ゴンとキルアが殺されちゃったら。』

「クラピカ君は、秘策があるんだろう？それに賭けてみるしかないんじゃないか？」

レオリオ『・・・解った。』

「それじゃー、すぐに向かう。」

マロンはこの時、重要なミスをしていることに、いまだに気づいていなかった。

レオリオが知っているのは、バロンのみ。

クラピカが知っているのは、バロンとシヴァのみ。

ましてや、クラピカが信用しているのは、シヴァの方であろう。

そして、マロンは、バロンの姿のまま、一度、クラピカと会うつもりで居た。

少しずつ、マロンは、危ないことへと足を踏み入れていくこととなる。

(まずは、クラピカを捕まえないと。)

電話のプッシュボタンを押し、クラピカの名前でコールを鳴らすと、
思いのほか、その人物はすぐに出た。

「クラピカ？私、シヴァだけど？」

クラピカ『・・・ああ。』

「・・・何かあったの？」

声の様子から、何かがあったことは確かだが、いろいろな事があり
すぎて、クラピカに問いかける。

クラピカ『・・・幻影旅団の・・・一人を捕らえた。』

「?!・・・それで？そいつから、何か聞き出せたの？」

クラピカ『・・・ああ。クルタ族を滅ぼす計画を立てて、手にか
けたのは、自分だと言った。』

「・・・まさか・・・殺したの？その、幻影旅団も?!」

クラピカ『・・・仲間の恨みを晴らしたかっただけだ。』

「そんなの、クラピカが、苦しむだけじゃん!」

クラピカ『・・・私は、間違っただけじゃない。』

「っ！；…………ゴンとキルアが、幻影旅団につかまった。」

クラピカ『?!な…………に?…!』

「彼らが、生きてる保障は今のところない。だけど、もし、クラピカ君関係の事で捕まってるんだったら、生きてる可能性がある!それなのに、幻影旅団の一味を殺すなんて…助ける手がない…」

クラピカ『…………?シヴァ。貴方は、ゴンとキルアとも知り合いないのか?』

「…………え?」

クラピカ『…………なぜ、ゴンとキルアの事にそんなに詳しいの?この、仕事の間中、君が、忙しく働いていた事は知っている。それなのに、ゴンとキルアと知り合う暇がいつ、あった?』

(やばい!…忘れていた…私は、マロンであり、マロンじゃなかった…)

何面相も顔を持っていても、中身は、同じ。

口から、ぼろが出るのは時間の問題だったのだ。

「…………全部、話す。だから、今は、レオリオ君の居るホテルに行きたい。そこで作戦を練ろう。」

クラピカ『私が君のほうへ向かう。どこまでが本当で、どこまでが嘘なのか、信用できないからね。』

「クスクスツ 信用してくれとは言わないわ。早く、合流しましょう。ゴン達の身が気になるわ。」

そして、しばらくすると、マロンが泊まってるホテルのクラピカがやってきた。

「行きましょう。」

クラピカ「待ってくれ！君は、誰なんだ？！」

そう。マロンはマロンの姿のまま、クラピカと合流したのだ。

「それも、後で話すわ。今は、一刻も早く、レオリオ君との合流を。」

クラピカ「！・・・ああ。」

そして、レオリオの居るホテルへとやってきた、3人は合流した。

レオリオ「クラピカ！久しぶりだな；それに・・・えっと？」

「初めましてと言うべきなのかしら？ Baronよ。いいえ。本当の名前は、マロンね。」

クラピカ「?! 一体、どういうことなんだ?!」

レオリオ「そうだ；Baronの・・・妹か何かか？それで、俺たちの事も聞いたんだろ！」

二人とも、マロンが言ったことは、まったく信じていないようだ。

「念能力なの。私の。老若男女になれるのよ。」

レオリオ「……マジか?」

「ええ。実際のこの姿が、本当の姿。」

クラピカ「では、なぜ、今まで、その姿を隠していたのだ? 隠す理由があつたからだろうか?」

「大正解よ。」

レオリオ「……まさか、幻影旅団の一味?!」

「それは、不正解。あの人たちとは、全然、知り合いじゃないもの。私の弟が、貴方たちの友達でね?」

クラピカ「……?」

「ああ。似てないから、解らないわよね。ゴンは、義理の弟なの。」

レオリオ「?! ゴンが! って、ゴンの義理のお姉さん?!」

「ええ。ゴンとは、仲が悪いわけじゃない。ただ、あの子、決めた事には突っ走る体質で、私が邪魔するのも許せない子だから。」

クラピカ「……だから、隠れて支えよう?」

「いいえ。ゴンとは……関わるつもりはなかった。姉離れ、弟離れすべきだったのに、こんなにも、運命は、私たちを引き合わせ

た。」

レオリオ「バロンもあんなのか？だから、ゴンを遠ざけようとしたのか！」

「そう。だけど、キルア君とも仲がよくなって、クラピカ君や、レオリオ君とも、関わっているうちに、離れなくなってたの。」

クラピカ「……。」

「この話は、ここまでにしましょう。今は、ゴンとキルアの救出が先よ。」

レオリオ「そうだけど、一体、どうするんだ？」

「……ヒソカに連絡を取る。」

レオリオ「なっ？！無謀だ！第一、ヒソカが、協力するとは思えねえ！」

クラピカ「だが、それに賭けるしか方法はない。」

「ヒソカは、ゴンの事を気に入ってる。殺すような事はしないでしよう。そして、幻影旅団、団長とも戦いたいと思ってるはず。ヒソカが、協力しない可能性はない。」

レオリオ「協力したとして、その後はどうする？！戦うのか？！幻影旅団と？！」

「何名か、捕らえられれば、人質交換ができるはず。特に、幻影旅

団団長がキーパーソンね。」

クラピカ「だが、どの人物が、幻影旅団団長かわからない。」

「それは、私に任せて。ネオンⅡノストラードを監視してる際に、団長らしき人物を見たわ。」

レオリオ「すげー；」

「兎に角、まず、ヒソカとコンタクトを取りましょう。そして、行動よ。」

こうして、マロンは、幻影旅団との交戦に加わる事となったのだ。

交渉

ブルルルルッ

カチャッ

ブルルルルッ

ヒソカ『もしもし?』

「ヒソカ。誰だか聞かないところを見ると、私が話したい内容も解ってるわね?」

ヒソカ『んー?・・・僕への愛の告白とか?』

「ふざけないで!・・・そこに、幻影旅団団長は居るの?」

ヒソカ『・・・ああ。居るよ。変わってほしい?』

「ええ。」

ヒソカ『良いけど、タダとは言わないよね?』

「・・・ヒソカの行動しだいね。」

ヒソカ『・・・解った。交渉成立。団長。君と話したいって人物が。』

クロロ『?誰だ?』

電話の向こう側で、警戒している男の声が聞こえてきた。

ヒソカ『僕の大切な人物。手を出したら、団長でも許さない。』

3人「……;」

スピーカーフォンにしているため、3人が顔を見合わせ苦笑する。

クロロ『お前が気に入るなんて、珍しいな。……良いだろう。……誰だ?』

「ナンバー11は死んだわ。」

クロロ『……ほう?その証拠は?』

「鎖野郎の事、相当、頭にきてたみたいね。可哀想に。」

クロロ『何が言いたい?誰なんだ?』

「用心深いのは構わないけれど、もう、仲間を失いたくないでしょう?」

クロロ『何?』

「……誰も、失わないために取引しましょう?そこに、10歳くらいの坊や二人、居るでしょう?」

クロロ『……どこまで情報を握ってる?』

「……その坊やたちに手出ししないで、無事に帰すというのがあれば、全部、話すわ。」

クロロ『俺にとってのメリットがない。』

「そうね・・・私が、そこに居る坊やたちの代わりに仲間に入るといったら？」

クロロ『?!』

クラピカ「なっ?!:」

レオリオ「?!:」

バツ!!

隣で聞いていたクラピカ君が声を上げようとしたが、何とか、レオリオ君に押さえ込まれた。

クロロ『。。。』

「・・・欠番がある今、この話はいい話だと思うけど？」

クロロ『・・・君がどれくらい、俺の見込みに答えられるか解らないからな。』

「では、会いましょう?直接、会ってお話をしたいと思っていました。人数は、少ないほうが良いですよ?・・・過って、殺しかねませんから。」

この時、マロンは、自分が出せる憎しみの声を全開で出していたため、クラピカ君とレオリオ君は目の前で怯えてしまった;

クロロ『・・・そちらの人数は?』

「私に仲間が居ると思つて？坊や達は、可愛いから、たまたま手助けができるならと思つてるだけだし、関わりはないわ。ですから、私一人で、グリーンベレッツホテルのロビーに居ます。1時間後ですか？」

クロロ『……』

重い空気が周囲に漂う中、団長の決断が。

クロロ『良いだろう。俺と、もう一人、連れて行く。用心のためだ。それで構わないなら、そのホテルに向かおう。』

「良いわ。待っている。」

そう言うと、携帯をお互いに切る。

クロロ「……何者だ？あいつは？ヒソカ？」

ヒソカ「自分の目で確かめなよ？僕は、お気に入りの子を、わざわざ、団長に教えるつもりはない。」

私たちの知らないところで、小さな火花が飛んでいた事は、知る由もない。

「これで、団長がやってくる。けれど、どうすれば、捕まえられるかよ。ましてや、二人。難しくなりすぎた。」

クラピカ「いや。捕まえるのは、私がする。二人は、作戦を実行してほしい。」

レオリオ「おいおい・クラピカ・また、危ない事をするんじゃないんだろーな?」

クラピカ「誰かが犠牲を払わなければ、ゴンとキルアは、無事に帰ってこないだろう!」

「けれど、この事も忘れないで? 私達の今回の目的は、あくまでゴンとキルアの救出。幻影旅団の首を取るんじゃない。解ったわね?」

クラピカ「っ! ; ; . . . ああ。解っている。だが、さっきの言葉は、気に入らない。」

「? さっきの言葉?」

クラピカ「. . . マロンさんが、幻影旅団の仲間に入るとい内容の話だ。」

「あれくらい言わないと、信じてもらえないじゃない!」

レオリオ「だからって、もし、失敗ししまった時、マロンまで、連れて行かれちゃったら!」

「私は、二人の知らない念をまだまだ持っているのよ? だから、安心して?」

マロンは、二人を安心させるためにそう告げたが、マロン自身の念は、もう、底をつきかけていた。

クラピカ「では、作戦を話す。これが成功すれば、幻影旅団団長と取引可能だ。」

この時、マロンは知る由もなかった。

自分の能力がどこまでつきかけているのかを。

この過ちで、自分の運命を変えようということ・・・。

ヒソカに願い

【ヒソカ視点】

ヒソカ「……………」

それは、突然の出来事だった。

マロン『ヒソカにお願いがあるの。誰にも聞かれない様に話したいんだけど?』

愛しのマロンが僕に願いなんて、よっぽど困ってる事があると見える。

だから、僕は、快く、マロンの要求通り、仲間には聞かれない所でマロンに電話をかけた。

マロン『もしもし?ヒソカ?』

ヒソカ「ああ。どうしたんだい?」

僕は、要件をマロンに聞いたでした。

マロン『……こんな事、頼んで申し訳ないと思うけど、私を匿って欲しいの。』

ヒソカ「?匿うって?」

マロン『私の念能力は、もう、底を尽きてるの。無理矢理、使って

入るけど、限界なの。』

ヒソカ「それで？」

マロン『・・・きつと、貴方に次に会う時には、私は、倒れてしま
うと思う。私は、ゴンに会ってはいけないの。だから、ヒソカの力
で、私をバロンの姿の状態かマロンになっても隠せるようにはでき
ない？』

ヒソカ「それは、不可能じゃないけど、それって、幻影旅団に捕ま
るって事だよ？」

マロン『解ってる。でも、他に方法は思いつかないの。奇術師ヒソ
カの腕を借りたい。お願い。』

ヒソカ「・・・解った。マロンの事は、僕が守るよ。それじゃ、後
日、また会おう。」

マロン『ありがとう。無理なお願い、聞いてくれてありがとう。そ
れじゃ。』

そう言って、マロンは電話を切った。

【ヒソカ視点終了】

マロン「・・・。」

電話を切って、マロンは、倒れそうになるのをどうにか堪えた。

マロン（・・・もう、時間がない；早く、行動に移さないと・・・）

震える足を何とか立たせ、クラピカとレオリオの元へと戻るマロン。

クラピカ「マロンさん。こちらの準備は整いました。」

レオリオ「俺の方も良いぜ！作戦を実行に移そう！ゴンとキルアを助けるんだ！」

マロン「そうね。二人を救いましょう。失敗は、許されない。2人とも。気を引き締めてね？良い？クラピカ君？これ以上、幻影旅団を刺激しない事。じゃないと、付け狙われるのは、貴方だけじゃないのよ？」

クラピカ「・・・解ってる。今回の目的は、あくまで、ゴンとキルアの救出だ。それ以上の目的はない。約束しよう。」

マロン「それじゃ、行きましょう。時間よ。」

こうして、マロン、クラピカ、レオリオの三人は、ゴンとキルアを救うために、行動を開始したのであった。

作戦実行

グリーンベレッジホテルのロビーに着いた私達は、配置にそれぞれ着いた。

公証人として、会う事となったマロンは、シヴァの姿になっていた。

クラピカは、幻影旅団団長を捕えるために遠くない場所で、シヴァを見つめる。

レオリオは、近くには居ないが、重要な任務を担っていた。

そして、時間通りに幻影旅団団長と、もう一人の女が現れた。

「……。」

クロロ「……。」

女「……。」

周りは、一般客のみ。この3人の異様な空気には気づかない。

そして、シヴァは、クラピカとレオリオにしか解らない合図を送った瞬間。

バチンッ！

クロロ「?!なんだ?!」

女「?!周りが、見えない!;」

グリーンベレッジホテルのロビー一面が、一瞬にして、電機が落ちたのだ。

そう。シヴァ達が考えた作戦とは、視覚を奪い、捕獲する事。

人間の視力と脳は、伝達が遅いもの。

光で目が慣れてしまった状況下で、一瞬の間に周りを闇の世界にした瞬間、視力は役に立たなくなるのだ。

レオリオが任されていた仕事は、グリーンベレッジホテルのロビー全体の電気を落とす事。

そして、一瞬の隙が生み出された幻影旅団団長とそのメンバーは。

クロロ「.....」

女「.....」

クラピカ「任務、成功だな。」

クラピカの念により、捕えられた二人の姿があった。

クロロ「やはり、仲間がいたんだな。それも、鎖野郎と。」

「仲間・・・確かにそうね。けれど、命を奪うつもりはないわ。私達の目的は、あくまで、人質交渉ですもの。」

レオリオ「よっしゃ！これで、ゴンとキルアを助ける事が出来るな。」

「喜ぶのは、まだ早いわ。幻影旅団の他のメンバーは、手強い。交渉時に、攻撃をされでもしたら、終わりだわ。」

クラピカ「それなら、二人に、束縛する中指の鎖チエーンジエイルを使い、律する小指の鎖ジャッジメントチエーンで、我々を追えない様に制約付けては？」

「火に油をこれ以上、注ぐ事はないわ。団長さんが、仲間にも忠告すればすむ事だわ。貴方の命令は、絶対なんですよ？」

クロロ「・・・何故、そう思う？」

「簡単だわ。貴方を観察していて解った。貴方は、完璧主義者。仲間達を危険に犯していながら、自分も危険の中に立っている。そんな人物は、メンバーの破滅は恐れてない。多分、貴方が一番、恐れるのは、旅団の崩壊でしょ？」

クロロ「・・・。」

「そして、今、その危機に陥ってる。けれど、それを救う道があるとしたら縋るでしょ？団長さん？」

クロロ「・・・さっきから、何を言ってるんだい？僕は、普通の青年で、幻影旅団とはまったく関係は。」

「クロロ＝ルシルフルって言うのよね？本名は？」

クロロ「?!」

「あら？驚き？そうよね。地上じゃ、出回らない幻影旅団の個人情報。それも、旅団帳の情報を持つてると知ったら驚くわよね。」

クロロ「・・・ヒソカから、聞いたのか？」

「彼は、貴方の事を話してないわ。私が貴方に会った事があるのよ。」

クロロ「ほう？君みたいに美しい人物、一度、見たら、忘れるとは思えないけどな。」

「・・・世間話が過ぎたみたいね。とにかく、私達は、ゴンとキルアの二人が、無事に戻ればそれで構わない。どう？条件をのむの？」

クロロ「・・・俺達が血眼になって、お前達を追うかもしれないぞ？」

「その時は、貴方達を容赦なく、排除させてもらうわ。今は、貴方達を失うのは、得策じゃないから、止めておくけどね。結論を。クロロシルシルさん？」

クロロ「・・・交渉しよう。」

「ありがとう。話の解る人で良かったわ。」

こうして、ゴンとキルア、救出作戦は、終盤へとやって来た。

交換成立（前書き）

だいぶ、話の内容や、セリフが違っていると思いますが、すみません；

久しぶりに描いたので、小説の中身がここまでグチャグチャだとは思わなかったもので；

度々、更新が遅れて申し訳ありませんでした；

これからは、再び、書き始めたいと思うので、よろしくお願いします；

交換成立

捕まえた、幻影旅団団長は、要求通り、仲間にゴンとキルアを解放するように伝えた。

そして、落ち合う場所や時間も決め、シヴァ（マロン）達は、その場所へと向かった。

キッ！

ガチャッ

バタンッ

「・・・降ろして。」

クラピカ「・・・。」

クロロ「・・・。」

シヴァの合図で、クラピカが、団長を引き連れ、車から降りた所で、飛行船が見えた。

「あれね。」

そして、飛行船は、静かに降り立つと、その中から、数名、降りてきた。

マチ「・・・。」

ゴン「・・・。」

キルア「……。」

ヒソカ「……。」

見た事のある面々だったが、お互いに、今、気にしてる暇はないよ
うで、直ぐに取引が始まった。

「まずは、人質が、操られていないか確認したい。電話を繋ぐ。」

トウルルルッ！

キルア『もしもし？』

電話口に出たのは、少し先に居るキルアだった。

「キルア。胸に電話を当ててくれる？」

キルア『「うっ？」』

そう言うと、キルアは、胸に電話をくっつけた。

センリツ「ええ。良いわ。……大丈夫。音に、異常な乱れはない
から、操られてないわ。」

仕事仲間のセンリツに、操られていないかを確認したシヴァは。

「同時に人質交換しましょう！」

マチ「良いわー！」

シヴァの言葉に、マチは頷き、人質を解放する。

それを見たシヴァも、クラピカに同じく、人質を解放させた。

ゴン&キルア「……。」

クロロ&パグノダ「……。」

人質として捕らわれた者たちがすれ違っても何も起こらずに、交渉成立となった。

レオリオ「ゴンっ！キルアっ！心配したんだぜ！」

クラピカ「全くだ；もう、余り無茶をしないでくれないか？」

ゴン「2人とも、ごめん；」

キルア「悪かったな；クラピカにおっさん。」

レオリオ「おっさんって言うの、いい加減に止めるよな！」

ゴンとキルアの無事な姿を捕えたためか、シヴァの状態を気付く者は居なかった。

「っ！；……。」

念の使いすぎと、体力の限界が、今になって来てしまい、シヴァは、もう、立ってられるような状態ではなかった。

ヒソカ「！“薄っぺらな嘘”トッキリテクスチャー。」

ヒソカが、声を出さずにそう言い、シヴァを薄っぺらな嘘で、隠すドッキリテクスチャーと、伸縮自在の愛バンジーガムによって、シヴァを引き寄せ、抱きしめた。

（ありがとう・・・ヒソカ・・・ごめんね。迷惑・・・掛けて。）

抱きしめられながら、シヴァの姿は消え失せ、元の姿となり、ヒソカと共に、飛行船に乗り込んだマロン。

ゴン「あ！そう言えば、あの、水色の人に、お礼、言ってなかった！お姉さん！ありがとう・・・って、あれ？」

キルア「？何処に行ったんだ？」

クラピカ「？私も解らない。」

レオリオ「俺もだ；」

ゴン「・・・。」

こうして、マロンは、気絶し、ヒソカと共に、飛行船に乗り込んだのであった。

交換成立（後書き）

この先から、オリジナル小説へ転換したいと思います。

キメラアントとの戦いは、私には書けない代物かと思ったので；

キメラアント編がないのは変だと思われる方には、すみませんが、

ご了承していただくしかありません；

これから先は、オリジナルキャラである、マロンさんに関するお話に進んでいくと思われれます；

ゴンとキルアを登場させれる時まで、少々、お待ちを！；

ご迷惑をおかけします；

ヒソカ視点？

「……………」

ヒソカ「……………」

僕の名前は、ヒソカ。団長達を救出する際にマロンを連れてきた。

あれから、一週間が経過したが、マロンは、目覚めない。

流石の僕も、心配になってくるが、どうする事も出来ずに見守り続けていた時。

「……………」

ヒソカ「……………マロン？」

「……………ここは？」

ゆっくりと目を覚まし、周りを見回すマロンに僕は、近づく。

ヒソカ「ここは、幻影旅団の飛行船の中だよ。ほら。マロン、頼んだら？」

僕は、そう言いながら、マロンに水を差し出す。

「……………ああ。うん。思い出した。ありがとう。ヒソカ。」

マロンは、記憶を手繰りながら、自分の体を起こすと、水を受け取

り礼を言ってくる。

ヒソカ「気にしないで。僕が、やりたくってやったただだから。」

僕は、水を促しながら、話を続け。

「うん。それでもありがとう。」

マロンは、再び礼を言うと、水を飲みだした。

そこで、僕は、マロンの変化に気付き、聞きたい事があったので、聞いてみる。

ヒソカ「ねえ？マロン。念が、感じられないけど？」

そう。僕が、気づいたのは、マロンの念能力が感じないという事。

「・・・そうだね。感じないでしょうね。」

ヒソカ「・・・どうしてか聞いても良い？」

「・・・念の使いすぎ。」

ヒソカ「念の？」

「そう。電話した時に言ったでしょ？私は、倒れるって。念の使い過ぎで。」

ヒソカ「けど、念がなくなるとは。」

「なくなってる訳じゃないよ。使えないだけ。どのくらいの期間か、解らないけど。」

ヒソカ「？解らないの？」

「うん。私の念の機能は、凄く不思議なものだから、使えない期限が定まってないの。けれど、使える期限は決まってる。それを今回、有に超してしまった。」

ヒソカ「それじゃ、今、あの妖精みたいな子たちは、居ないの？」

僕は、マロンの言葉の内容に楽しくなり問いかけながら近づこうとし。

「あ。いない訳じゃないよ。見えないだけで、皆、私の中に居るから。」

ヒソカ「？中？」

「そう。見えないし、念を感じないだろうけど、皆、私の中に居るから、ヒソカが私に何かしようとするれば、私の意思を無視して、攻撃するわ。」

ヒソカ「本当に？v v」

マロンの話した内容に、テンションが上がってしまい。

「攻撃しようとししないでよ？； 私は、殺したくないんだから。」

ヒソカ「だって、マロン、天空闘技場の時、本気、出してなかった

でしょ？」

「……気付いてたんだ。」

ヒソカ「うん。なんとなくだけどね。」

「……そう。けど、今も戦うつつもりはない。念が使えなくて、この子たちの制御が利かない今、貴方に攻撃はして欲しくない。」

ヒソカ「……解ったよ。君が嫌がる姿は見たくないから、止めておくよ。」

マロンに嫌われたくなく、僕は、今回は、引き下がる事にした。

「……それよりも、あれからどの位、経ったの？……団長さん達は無事？」

ヒソカ「マロンが倒れてから、一週間が経ったよ。団長は無事。」

「……“団長は”？って、どづいつ事？」

ヒソカ「……もう一人、捕まえただろう？」

「……ええ。パクノダさん……よね？まさか、死んだの？」

ヒソカ「そう言う事。」

「どうして?! クラピカ君の念の能力は、教えたはずよ!なのに……
・なんで!」

マロンは、僕の言葉に驚き、布団から出て、涙目に問いかけて詰め寄り。

ヒソカ「念を使ったみたい。」

「？“みたい”？」

マロンは、僕の言葉をちゃんと聞いてくれる。親身になって。そう言う所が、堪らない。

ヒソカ「そう。彼女の念も、君と同じで、特質系の念能力者だ。僕は彼女の能力を詳しくは知らないけど、念を使ったのは、間違いないよ。」

「・・・そう。」

ヒソカ「・・・団長には、君が目覚めたら合わせるように言われているんだけど？」

「やっぱり、気づいてるんだ。」

ヒソカ「僕が何かしようとしてるのは、勘が良いからね。君を連れ込んだのに、直ぐに気付いたよ。どうする？会いたくないなら、会わなくても。」

「・・・ううん。団長さんに会う。きっと、話さなきゃ駄目なんだと思うから。」

ヒソカ「そう。それじゃ、今、呼んでくるから。」

僕は、そう言うと、部屋から、一度、出ていく事にした。

そうでもしないと、彼女に本当に何をするか解らないからね。

クロロの興味

ヒソカが出ていってから、自分の気持ちを整理しつつ、自分の中で生きる精霊達に話しかける。

(皆。私の言葉が聞こえてるはず。もし、団長さんが、私に何かしようとしても、何もしないで。)

マロンは、覚悟を決めて、団長に会おうと思っていた。

コンコンッ

すると、その時、ヒソカに与えられた部屋（ヒソカの部屋？）に、ノックの音が響いた。

ヒソカ『僕。入っても良い？』

「・・・うん。」

ガチャ

ヒソカ「・・・団長。良い？彼女との面会は。」

クロロ「5分間だけ。だろ？どれだけ、気に入ってるんだ？」

部屋の扉が開き、団長であるクロロが、中に居るマロンを見つめる。

クロロ「？あの水色の女じゃないが？」

ヒソカ「あの女性がその水色の女性自身だよ。」

クロロ「何だと？」

クロロが、疑わしげに、部屋の中に佇んでる女を見つめる。

「……。」

マロンは、居たたまれなくなりそうなのを堪え、椅子に座り続け、相手が動き出すのを待つ。

クロロ「……まあ、良い。話せば、解る事だ。」

ヒソカ「マロン。気をつけてね？団長に気に入られると厄介だから。」

「ありがとう。後でね。ヒソカ。」

ヒソカ「うん。」

そう言い、クロロが部屋の中に入り、ヒソカは、部屋から離れていった。

クロロ「……ヒソカが気に入ってるから、凄い人物だと思っていたが、まさか、こんなに普通とは。」

「……兎に角、立ってお話するのもどうかと思うので、座って下さい。私の部屋ではありませんが。」

目の前に置いてある椅子を勧め。

クロロ「それで？“水色の女性”と君は、本当に同一人物なのか？」

「ええ。」

マロンは、嘘を吐く事なく、正直に話す。

クロロ「・・・念か？」

「それは、言いつもりはないですね。」

クロロ「クツクツク。それは、肯定と取れるが？」

クロロと呼ばれた団長は、マロンの言葉に笑ってしまい。

クロロ「そう言えば、自己紹介がまだだったな。俺の名前は。」

「知ってます。クロロ＝ルシルフルでしょ？」

クロロ「何？」

「私は、貴方に既に二回、会ってます。」

クロロ「・・・一回は、鎖野郎の時だと思うが、もう一方には記憶がないが？君自身も、水色の女性も。」

疑わしげな目線で、マロンを見つめながら、探るように問いかけ。

「・・・ネオン＝ノストラードに会った時に、男も居たのは、覚えていますか？」

クロロ「男？あの時は、標的が、彼女だったから……まさか。」

ほんの少し記憶を探り、目立つ男が居た事を思い出し。

「そのまさかです。あの人物は、私です。」

クロロ「?!男にも……なれるのか。」

マロンの言葉にかなり驚き、目を見張り。

「そうなりますね。」

クロロ「……なるほど。ヒソカが気に入ってる理由が解ってきた。」

「それよりも、何故、あの女性は死んでしまったんですか？鎖野郎である、クラピカ君は、貴方達に念を使うと言っていた。それは、死を意味すると解っていたはずです！なのに、何故！」

クロロ「……パクノダは、人の記憶を読み取る事ができる能力者なんだ。」

「人の記憶？」

クロロ「そうだ。ゴン君とキルアくんに触れた時、ゴン君の方からとてもいい記憶が見て取れたんだらう。君たち仲間の記憶だ。」

「？」

クロロ「つまり、パクノダは、ゴン君達を殺すのが惜しいと思った

んだ。だが、このまま放っておけば、ウボォーを殺した、鎖野郎を追う者が出る。だから。」

「だから……自分の身を投げて、念を使ったと？」

ククロ「そう言う事になる。」

「……では、もう、ゴン達を追うつもりはないんですね。」

ククロ「ああ。ない。ただし、他に欲しい者を見つけたが。」

「え？」

マロンが安心したのも束の間、団長としてのスイッチが入った様に告げ。

ククロ「君だ。俺は、君が欲しくなった。」

「なっ！； 私達の記憶を彼女から聞いたか何かしたんでしょう？！だから、諦めると！」

ククロ「俺は、パクノダから、記憶は見せてもらってない。それに、見た仲間の話に、君に関する事は言っていなかった。」

「私は、貴方達の仲間になんかならないわ！“二度と”人殺しはしない！」

ククロ「……“二度と”？だと？」

「……え？なんで……私……二度となんて；」

マロンは、自分が言った言葉が不思議でたまらなかった。

そして、徐々にマロンは、怖くなり、体が震えだした。

クロロ「おい。顔色が悪い。どうかしたか？」

そう言い、クロロが手を、マロンへと近づけた瞬間。

バチッ！

クロロ「?!」

マロンの体から、高圧電流のようなものが発せられていた。

「止めて；皆・・・静まって；・・・私は・・・平気だから；」

マロンは、何かに眩きながら、自分の体を抱きしめる。

クロロ「・・・。」

「クロロ・・・さん。それ以上・・・近づかないで下さい；」

クロロ「・・・解った。」

クロロが、その言葉にすると、マロンの体にまとった電流が止まった。

「・・・。」

ドサッ

そして、マロンは、気を失ってしまった。

自分の秘密に気付く事なく。

だが、その秘密は、少しずつ剥がれていく事になる。

マロンの過去

ヒソカ「……………」

「……………」

また、僕だよ。一度、目を覚ましたマロンがまた、倒れてしまった。5分経過して、部屋に戻ってみると、クロロが固まっていて、マロンが倒れていた。

だから、僕が、彼女を抱きあげて、ベッドに戻そうとした。

クロロ「その女、危険だ。」

団長が、珍しくそんな事を言うから、一度、マロンを見つめたが、僕は、気にすることなく、抱きあげたんだよね。

何もなかったよ？

だって、1週間前もそうだったから。

でも、団長が警戒するほどの何かが、この5分間の間にあったんだろうけど、僕は気にせずにマロンをベッドに寝かせた。

クロロ「何者だ？」

ヒソカ「今は、何も話せないよ。僕も……彼女もね。」

クロロ「……。」

団長が、そんな事を僕に聞いて、去っていったが、実の所、僕も彼女の事をよく知らない。

だから、答えられないんだ。彼女が、目覚めるまではね。

こうして、僕の目の前で、また、彼女は眠っている。

「……。」

ヒソカ「……君は、一体、何者なんだい？」

僕は、小声で、マロンに問いかけるも、マロンからは、答えがない。

ヒソカ「……マロン。」

「……私にも……その答えは解らない。」

ヒソカ「?!……起きて……居たのかい？」

目を開けて、ベッドに横たわるマロンに問いかける。

「少し前からね。……考えてたの。」

ヒソカ「考えてたって何を？」

僕は、椅子に座りながら、マロンに優しく問いかける。

「……私、拾われる前の記憶がないの。」

ヒソカ「・・・うん。」

「ジンに・・・拾われてから、色々な事があつたから、覚えていないのも・・・不思議じゃない。けれど、何か、私の中で渦巻いてる気がしてならないの。」

ヒソカ「それが何かは、マロンは？」

「解らない。けれど、何かを忘れてるんだと思う。」

ヒソカ「どうするんだい？」

「・・・知りたいよ。けど、怖い。それでも、知らないといけないんだと思う。」

マロンは、体を起こしながら、考え。

ヒソカ「そうだ。1週間、眠り続けていたんだ。食事をとろう。考えるのはそれからでも構わないだろう？」

「けど。」

ヒソカ「大丈夫。他の奴らには何も言わせないから。」

「・・・私は、ここに居て良いの？」

ヒソカ「当たり前じゃないか。・・・どうしたんだい？僕が、怖いかい？」

ヒソカは、出て行こうとした体を戻し、マロンに近づき問いかけ。

「ヒソカが怖いんじゃない！……私自身が怖い。何者なのか、自分でも解らない。」

ヒソカ「僕だって、そうだよ。怖がる事なんかない。」

「けど！……もし、過去に人を殺してたら？どんな理由か解らない。貴方達をもし、手に掛けるような事があつたら？」

ヒソカ「……そうだったら、僕が、全力で、マロンを止めてあげる。守ってあげる。」

ヒソカは、優しくそう言い、マロンを抱きしめる。

「ヒソカ。」

ヒソカ「マロンが好きなんだ。だから……。」

「っ……ごめん。やっぱり、私……」

ヒソカ「良いよ。答えなくって。僕が勝手に好きになっただけだから。」

「……ごめん。」

ヒソカ「とにかく、今は、早く元気になって欲しいから、何か、持つてくるよ。」

ヒソカは、そう言うと、部屋から出て行った。

ヒソカ（まだ、摘み取るには惜しい。けど、摘み食いしたいなあ
V）

ヒソカは、興奮する体や理性を抑えながら、歩いていき。

「……。」

マロンは、何日も体を横にしていたから、動きたくって仕方がない衝動に駆られていた。

そして、布団から抜け出し、部屋から出てみる事にしたマロン。

「……。」

念が使えない今、外に出る事がどれほど危険な事が解っているが、状況も気になっていたのでために、飛行船内を体験したくなった。

（これが、幻影旅団の人たちが乗ってる飛行船。何処に向かっているだろう。）

外を眺めてみるも、地上はかなり遠いのか、見えなかった。

「……。」

「……。」

（？）

外を眺めていた、マロンの耳に、話し声が聞こえた。

クロロ「水色の女に会った事があるのか？」

シャル「うん。競売場に居た時に、追って来た女に間違いないと思う。」

クロロ「攻撃してきたのか？」

シャル「ウボオーが、攻撃を仕掛けて、返り討ちにされたよ。」

クロロ「あのウボオーが？」

シャル「秒殺だった。殺す気だったら、あの時にウボオーは、死んだ。」

クロロ「本当に不思議な女だ。・・・少し調べてくれないか？」

シャル「俺も興味があったから、良いよ。」

「.....」

マロンは、会話を聞きながら、部屋へと戻っていった。

そして、暫くすると、食事を手にしたヒソカが、部屋に戻ってきた。

ヒソカ「マロン。こんな物しか作れなかったけど。・・・マロン？」

部屋に戻ってみると、そこにはマロンの姿はなく、テーブルの上に手紙があるのが見て取れ。

ヒソカ「・・・。」

カサッ

手紙を手に取り、内容を見る。

ヒソカに手紙

『ヒソカへ。私は、やっぱりここには居れない。自分が何者か知るために、知り合いに会いに行く事にしたから、私の事は気にしないで？助けてくれてありがとう。また、会おうね。』

マロンの手紙には、そんな事が書いてあって、僕は、戸惑った。

けど、追おうとは思わず、その手紙を大事にしまっておく。

ヒソカ（また、会おう。マロン。）

何処に行ったか解らない人物を想い、空を見つめる。

その頃のマロンはと言うと。

ビュウッ！

「っ！..」

空を飛んでいた。

事の発端は、幻影旅団の飛行船から、逃げだす方法を考えていたが、面倒になり、窓を開け、飛び出たのである。

念が使えないのに、ずんずん落ちて行く体。

（ああ； 皆、怒るかな；）

加速して、落ちる体に念を纏えないマロン。

これは、死ぬなど、すこし思っていた時だった。

？『そなたは、死なせん。』

「え？」

ヒュウッ！

暫く、重力に従い落ちていた体は、突然、重力に逆らい、浮かび上がる。

フエニックス『貴方様は、我々の器であるお方。殺す訳にはいかぬ。』

「フエニックス。・・・なんで？確かに、私は、貴方達の器かもしれない。けど、なんで、ここまでするの？」

フエニックス『・・・。』

「答えて。」

フエニックス『地面に着きます。』

「え？」

その言葉に、マロンは一瞬、フエニックスから意識を外す。

怪我もなく地上に辿り着いたマロンが気付いた時には、フエニックスの気配はなくなっていた。

「?!フェニックス!出てきて理由を聞かせて!」

マロンが自分の中に居るであろうフェニックスに向かって叫ぶも答えはなく。

「・・・私は、一体、何者なの?」

疑問は解決しないまま、周りを見渡す。

「それに・・・ここは一体?」

ガサガサツ

「?!誰?!」

カイト「お前こそ、誰だ?・・・って、マロンじゃないか?」

「?!カイト?!」

なんと、草むらから現れたのは、マロンのよく知ってる人物だった。

カイト「お前、なんでこんなところに?って言うか、本当にマロンか?」

「私に似た知り合いでも居る訳?久しぶり。仕事?」

カイト「ああ。マロンは、こんな所で何をしてるんだ?」

「・・・話せば長くなるの。・・・ねえ。カイト。私に初めて会った時、どんな感じだった?」

カイト「？なんだ？急に？別に、普通の餓鬼だと思っただが？」

「・・・ジンに何か聞かなかったの？私の事？押しつけられたんでしょ？」

カイト「押しつけられたって言うても、面倒を見たのはほんの少しだけだな。」

「それで？ジンに何か聞かなかったの？」

カイト「どうしたんだよ？なんで、そんなこと聞くんだ？」

「・・・私、ジンに拾われる直前や前の記憶がないの。だから、何があったのか知りたいの。」

カイト「そうだったのか。けど、俺は、ジンさんから、何も聞いてない。」

「聞いてないんだ。それじゃ、ジンに直接、聞いた方が良さそうだね。」

カイト「まさか・・・ジンを探すつもりか？！あの、自由人で何処に行くかも解らない人をか？！」

「・・・うん。けど、探さなきゃ。」

マロンがそう言い、立ちあがった時。

ブルルルルッ

ブルルルルッ

「?・・・ゴンから。」

カイト「俺と一緒に居るって事は秘密にしろよ?」

「解ってるわよ。」

ピッ

「もしもし?ゴン?どうかした?」

ゴン「あ・・・マロン?・・・今、大丈夫?」

「うん。平気。どうかした?」

ゴン「・・・前に、マロンと似た人と知り合いになったって言ったよね?やっぱり、あれは、マロン・・・だよな?」

「・・・ゴン。」

ゴン「俺の知らない所で、マロン、俺を助けてくれてたんだね。」

「ごめん。余計なお世話だったよね?」

ゴン「うん。」

(そう言うと思った。)

ゴン「けど、マロンのおかげで、俺や、キルアも無事だったって聞いて、だから、お礼を言いたかったんだ。」

「私の身勝手にやった事だから。」

そんな話をしていると、どこかから、何かが聞こえた。

「?・・・ちよつと、ごめん。ゴン。」

受話器を一度、保留にして、空を見上げると、そこには、幻影旅団の飛行船があった。

「なっ?!なんで、ここに、あの飛行船が?!」

カイト「?知り合いの飛行船か?」

「知らないわよ!ゴン!; ; ごめん!話は、ここまでよ!..」

ゴン『え?マロン?!急にどうしたの?!』

ゴンが向こう側で何かを言っているものの、マロンは、携帯の電源を切り。

「ごめん!; ; カイト; ; 私、行くね!..」

カイト「?!お・・・おい?!マロン?..」

マロンは、カイトに挨拶もそこそこに走り出し。

(私が居ない事がばれたんだ; ; そして、携帯を探知された; ; もつと、警戒するべきだった; ;)

空を見上げ、幻影旅団の飛行船と距離を離そうと必死に走り。

クロロ「・・・何故、あの女が逃げたんだ？」

ヒソカ「僕が、目を離れた隙にね。」

ヒソカは、とぼけた様子で告げ。

クロロ「シャル。携帯は？」

シャル「もう、切れてるけど、追ってるよ。」

クロロ「フェイタン。生かして捕まえる。」

逃亡

(逃げ切れるの?；)

あれから、走り続けてるマロン。

フェイタン「あの女、念が使えないから、見つけるの難しいね。」

団長の命令により、飛行船から出たフェイタンは、自慢の足で、刻々とマロンに近づく。

(あの人・・・早い；いくら、念能力者とはいえ、早すぎる；)

木の陰に隠れながら、やり過ごす、

(幻影旅団に捕まる訳にはいかない。けど・・・念が使えない今、捕まるのは、時間の問題；)

フェイタン「・・・。」

(どうすれば、逃げ切れるの?；)

カイト「マロン!」

マロンが、木の陰で隠れて居た所に、バイクに乗ったカイトがやってきた。

「?!カイト?!!..!」

カイト「乗れ！」

カイトは、バイクを巧みに操り、片手を離し、マロンを抱きあげ。

「ちよっ！；カイト！何をしてるの？！」

抱き上げられつつも、バイクは走り続け。

フェイタン「！居たね。」

バイクの轟音で、幻影旅団メンバーであるフェイタンが気づき、二人を追いかけ始める。

「なんで、来たの？！関わらせなくなかったから、言わずに離れたのに！；」

マロンは、体勢を整えながら、カイトに大声で言い。

カイト「一体、何だっけ言うんだ？！なんで、お前、あんなのに追われてるんだ？！」

カイトは、マロンを追ってる人物が何者か解らないが、危険を感じ問いかけ。

「それは、話せば長くなるの；って、そんなことより、どうするの？！あの人、バイクの音で気づいちゃったよ？！」

フェイタン「。。。。」

カイト「そうみたいだな；あいつ、早いなあ。」

後ろを確認しながら、バイクを走らせ続けるが、徐々に距離は縮んでいき。

「カイト；」

カイト「くそ； このままじゃ捕まっちゃうぞ?!」

バイクから、後ろを見ると、あと数メートルの距離に迫っていた。

「・・・カイト。私に念を少しでいいから分けて。」

カイト「念を? って、お前、念能力者なのか?!」

「それも、後で説明するから、念を送って!」

マロンは、カイトに片手を差し出し、切羽詰まった様に告げ。

カイト「解った!」

カイトは、訳が分から今でもマロンに念を送るために、片手をマロンのと重ねた。

(バンク・・・バンク! 聞こえてるでしょ? 力を貸して。ここから、なるべく遠くに行きたいの。お願い! ;))

カイトは運転しながら、マロンに念を送り続け、マロンは、自分の念に語る。

そして、後、少して、幻影旅団の人間に捕まるという所で、二人の

姿は消えた。

フェイタン「なっ?!」

フェイタンは、周りを見回すも、そこには誰も居ない。

フェイタン「今は・・・念?どっちの念ね。」

消えた二人の行方が分からず、飛行船に戻るフェイタン。

その頃、マロンとカイトは・・・。

「・・・ん。ここ・・・は?」

マロンとカイトは、人気のない森の中で倒れていた。

「!カイト!カイト!大丈夫?!」

カイトに歩み寄り、カイトを揺すり起こす。

カイト「ん・・・マロン。・・・助かったのか?」

「そうみたい。怪我は?」

カイト「俺はない。お前こそ、大丈夫か?」

「うん。流石に、猛スピードで動いてるバイクと私達を飛ばすのは危なすぎたみたい;」

マロンは立ち上がり、周りを見回す。

カイト「お前・・・特質系の念能力者か？」

カイトも立ち上がりながら、マロンに問いかける。

「・・・うん。ここは、何処なんだろう？」

カイト「は？お前が、ここに飛ばしたのに、解らないのか？」

「うん； 逃げる事で頭がいつぱいで、バンクに何処でも良いから遠くって言ったから； でも、私が言った事ある場所にしか飛ばせないから、知ってるはずなんだけど；」

カイト「見覚えはないのか？」

「・・・あ！」

カイト「なんだ？思い出したか？」

「・・・ここ、ジンと会った場所だ。」

カイト「何？！ジンさんと？！ってことは、お前が拾われた場所？」

「・・・うん。間違いない。」

マロンは、森を見つめながら、ゆっくりと歩き出す。

カイト「おい？マロン？」

「・・・ここで、私は、ジンと会った。」

茂みを見つめながら、自分の記憶を辿る。

カイト「……。」

「……その前は、一体、何処に居たの？」

しゃがみ、茂みに触れてみるものの、そこにはすでに、マロンが居た後は無く。

？「そこに居るのは、誰じゃ?!」

突如として、茂みから現れたのは、老人であった。

カイト「あ……すみません。この近くに住んでて懐かしくって、入っちゃったんですよ。」

カイトは老人に対して嘘を交えながら話す。

ファブル「そうじゃったのか。わしは、この森を管理しておるファブルと言う者でな。ここには、近づかない方が良い。」

老人はそう言いながら、その場をゆっくりと離れるように歩きだし。

カイト「どうして、この場所には近づかない方が良いんですか？」

ファブル「？なんじゃ、お主ら。知らないであそこにおったのか。それは、危険すぎる行為じゃよ?」

ファブルは、カイトとマロンを振り返り、カップルとも思ったの

か、優しく告げ。

カイト「どうして、あの場所に近づいちゃだめなんですか？」

ファブル「・・・あの場所と言うよりも、ほんの少し離れた場所が原因なんじゃが。」

「それは、何処なんですか？なんで、近づいちゃいけないんですか？」

ファブル「・・・そうじゃのお。カップルさんがまた近づかないように忠告ついで行くかい？」

そう言うと、老人は、方向を変えてゆっくりと歩き出す。

無くなった村

ファブルさん連れられて数分後、二人は、開けた場所に辿り着いた。

カイト「?!・・・なんだ?; ーここは?;」

「っ!;」

そこには、森が異様に途切れ、真っ黒になつて居る場所があつた。

ファブル「・・・ここにはの。村があつたんじゃ。」

カイト「村?」

ファブル「そうじゃ。小さな村じゃつたが、ある日の一夜に一瞬にして燃えたんじゃ。」

「・・・なんでですか?;」

ファブル「それは、わしは詳しくは解らないんじゃ。とにかく、ここは、焼け野原と化し、草木が一切、生えなくなつてしまつたんじゃ。とにかく、ここには、近づかない方が良い。」

ファブルさんは、再び、歩き出し。

「あ・・・他に村があるんですか?近くに。」

ファブル「勿論じゃ。わしは、そこに住んで居るしの。お主ら、付き合つて、どの位じゃ?」

「私達、恋人じゃ。」

カイト「長年一緒に居るんで、付き合ってる感覚が薄いんですよ。彼女。」

「?!ちよつと；何を言ってるの?」

ファブルに聞こえないようにカイトに問いかけ。

カイト「別に、疾しい事をしてた訳じゃないし、構わないだろう?」

「そういう意味じゃなくって。」

ファブル「着いたぞ?」

カイト「小さな村ですね。」

「あの場所から、そんなに離れて居ないのに、何ともなかったんですね。」

ファブル「そうじゃ。あの村からは、そんなに遠くないんじゃ。」

カイト「この村で、少し休ませてもらっても良いですか?」

ファブル「勿論じゃよ。」

「そうだ。カイト。携帯、変えたいの。」

カイト「それなら、俺の携帯を使えよ。俺、二台持ってるし。」

「さっきのあれ、見たでしょ?! 私とこれ以上、関わるのは危ないの!」

カイト「何、怒ってるんだよ; ここは、お前の思い出の場所なんだから? あんな奴らにそう簡単に見つかる場所じゃないだろ。」

「そうかもしれないけど;」

カイト「ほら。持っておけ。」

カイトは、マロンに有無を言わず、携帯を渡す。

「・・・新しいの買うまでは、これ、使わせてもらっね。」

カイト「そうしろ。」

ファブル「そう言えば、あの家に、村の生き残りが居るんじゃない?」

「え?」

カイトから、携帯を受け取りながら、ファブルが、呟く。

ファブル「あの村が焼けた日、たまたま、この村に商売に来てた様で助かったんじゃない?」

カイト「・・・。」

カイトは、何か言いたげな顔でマロンを見つめるカイト。

「・・・その人物に、会えますか？」

ファブル「会えなくはないと思うんじゃないが。外に出たがらないんじゃない。」

「何故？」

ファブル「何かを怖がってるようだな。村の物から聞いた話では、悪魔やサタン等と呟いて居たようじゃ。」

カイト「悪魔？」

ファブル「まあ、家は、そこじゃ。」

ファブルは、一軒の家を指さし、ファブルは、その場を後にした。

「……………」

カイト「マロン……」

マロンは、何かに操られるかのようにファブルが指さした家を目指す。

そして、人の気配がほとんどしない家の扉をノックする。

家の中『……………』

「すみません。誰か、居ませんか？」

？『……誰だ？』

「！……あの、私……シヴァと言います。」

？『……何か用か？』

「……あの……焼き払われた村の話を知りたくって；」

？『っ！； 何故、お主にそのような事を話さなければならぬ。』

男は、一度、困惑した反応を示す。

「……私も、あの村の生き残りなんです。」

？『……なんだと？』

男は、疑いながらも自分の家の扉を少し開けマロンを見る。

「こんにちは。」

？「……みた事ない顔だ。シヴァなど、聞いた事もない。」

疑い続ける男。

「あの村が焼き払われてかなり経ちます。貴方に会って居ないのも名前を知らないのも無理はないでしょ？」

？「……それもそうだな。それで、何の用だ？」

男は、見た感じ40代ほどで、喋りははきはきしていた。

「私は、あの村で生まれましたが、育っていません。ですので、あの村が、どうしてあぁなってしまうたか知らないのです。・・・教えてはくれませんか？」

クイル「・・・俺の名前は、クイルだ。入れ。」

クイルと名乗った男は、シヴァと名乗った女を中に招き入れる。

「・・・。」

カイト「おい。」

「貴方は、そこで待ってて。」

カイトに止められそうになるが、マロンは、気にせずに男の家の中に入る。

クイル「それでは・・・話してやろう。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8156c/>

ハンター初心者

2012年1月9日14時46分発行